可能（受動）	エ（ラエ）△	(a)ユ (b)ユル	ユレ
	レ（ラレ）△	(a)ル (b)ルル	ルレ
打消	ニ△（ナ）ヌ	・	ネ
	ズ△		ナ
	マシジ		ジ
	マジ	(a)マジ (b)マジキ	マジケレ
	ザリ△	(a)ザリ (b)ザル	ザレ
必然	ベシ	(a)ベシ (b)ベキ	ベケレ
比況	ゴトシ	(a)ゴトシ (b)ゴトキ	ゴトケレ

可能（受動）	エ（ラエ）△	エ	エニ エテ
	レ（ラレ）△	レ	レニ レテ
打消	ニ△（ナ）ヌ	ネ	ナ
	ズ△	ジ	ズテ
	マシジ		
	マジ	マジキ	マジク
	ザリ△	ザラ	ザリニ ザリテ
必然	ベシ	ベク	
比況	ゴトシ	ゴトク	

右の諸動詞中シ（強意）は動詞の原形に連接し、△印を附けたものは未來格につゞき、其他は皆動格に連ることを例とする。時格助動詞が上記の如く未來時詞の外は盡く原形に連用せられるのと相違する理由は時相に變化を及ぼさず、單に動態を修飾する用をなすものであるからであらう。但し此等の助動詞自身にも亦前目に准じて時格による活用が行はれる事は勿論である。

（イ）間接叙法

前目に掲げた時の活用の諸格にはいづれも助動詞ナリを添へて用ひることがある。例へば咲ク、咲キヌ、咲カム、咲キキを咲クナリ、咲キヌルナリ、咲クナラム、咲キケルナリともいふのである。此助動詞は活用語尾のナリ（ニ、アリの約）とは異り、ノ、アリを約したもので、ノは後記の如くコト（事）と同樣に動詞から抽象名詞を作る効用をも有するから（第五章ノの項下參照）、咲クノ、咲キヌルノ等は咲クコト、咲キヌルコト等と同義で、之にアリを連ねると、再び動詞形に復するが、咲ク、咲キヌ等が直接に事を叙べる語法であるのとは異り、ナリはノ卽ちコトといふ意を介するものであるから、間接叙法と稱すべきである。

此ナリはよく熟合して居るので、從來之がノ、アリの約である事をすら心付かなかつたのであるが、口語に於てはノが再び判然と現はれ、咲クノデアル、咲イタノデアル、咲クノデアラウの如く稱へられる。デは後記の強意助動詞シの項下に述べるやうに、助語トの轉化で、ノとアルとを連繫する爲に挿入せられたのであるが、之を除いては全然文語と同一の言葉づかひである。此語法が對話に用ひられることは稀で、講演、文章に常用せられるのも間接叙法なるが故である。

ナリは上例の如く二段活動詞（助動詞）につづく場合には動格のb型（連體形と呼ばれるもの）に連ることを例とするが、其は決して絶對的條件ではなく、慣用に過ぎぬから、「初雁がねぞ聞こユナル」「人まつ蟲の聲スナリ」（古今）の如くも用ひられるのである。此理を解しかねて此場合のナリは詠歎の意を含むと說くものもあるが、其は少數の例歌から推し當てた憶說で、語義上少しも理由のないことである。――歌詠は其性質上全然詠歎の意が含まれて居らぬ場合は極めて少數であることを思はねばならぬ。

右の如くナリは間接に事を叙する語法であるから、之を添へた爲に時格又は意味に變更を來すことはなく、以下に掲ぐる諸法助動詞にも連り、咲カシムルナリ、咲カヌナリ、見ラルナリの如くも用ひられる。

附記。　アリは旣述の如く極めて用途の廣い語で、「存在」を意味する獨立動詞として用ひられることの外に、ナリ（ニ、アリの約）、タリ（ト、アリの約）は活用語尾となり（第二章參照）、繼續時格の表示としてはアリ、タリ（テ、アリの約）、ケリ（キ、アリの約）の形に於て用ひられるから、混同せぬやうにせねばならぬ。ことに助語ニ又は分詞語分子テとアリとが連用せられる場合には、此語が動詞として用ひられたものか、助動詞であるかを判別せねばならぬ。助動詞の場合にはナリ、タリと約せられるが、動詞のアリ（在）を連約することは許されぬ。例へば萬葉集一卷に見える天智天皇の御製「いにしへも然爾有許曾」の如きは然ニ在レコソと詠まれたので、然ナレコソ卽ち然ナリといふ准動詞の一活用形と見ることは出來ぬ。さればこそ「こもりくの初瀨少女が手に卷ける玉は亂れテアリといはずやも」といふ歌（萬三）の如きもテで句を切つてあるのである。

右の外アリからの轉化した助動詞には次のラム、ラシの二種がある。

（ロ）推量

推量の意を表明するには左記の四語が用ひられる。

ラム。　アリの未來時格アラムの上略であるが、他の動詞に連ねて用ひると推量の意となり、間接叙法としてはナラム（ノ、アラム）といふ。口語では此場合にもデ（トの轉呼）を挿入してデアラウ（ダラウ）とし、――地方によつては行クラウ、知ルラウの如く、テを介せぬことがある――間接叙法にはノデア

ラウ(ノダラウ)を用ひる。

ラシ。 ラはアラ(アリの未然格)の上略、シは形容語尾で、ラムと同じく推量を意味する形容詞形であるが、シの原義は「其」であるから、朧氣ながら其と推定する意がある。例

(古今) 立田川もみぢ葉流る神なびの三室の山にしぐれ降るラシ

(同) ぬき亂る人こそあるラシ白玉のまなくも散るか袖のせばきに

(推古紀) 大君のつかはすラシキ

(萬二) 古もしかにあれこそ空(ウツ)せみも妻をあらそふラシキ

此助動詞は口語でも行クラシイ、見ルラシイの如く用ひられるが、接尾語として名詞に直接しても用ひられることは第二章形容詞語尾の項下に述べた通である。

マシ。 未來助動詞ムに接尾語シを添へた形容詞で、上記ラシと同じく未來を想定する意味に用ひられる。例

(古今) 今日來ずば明日は雪とぞ降りなマシ消えすはありとも花と見マシヤ

(同) 世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからマシ

未來時格が時として話者の意嚮を表示すると同様に、マシも亦希望を意味することがある。例

(萬二) 我妹子に戀ひつつあらずば秋萩の咲きて散りぬる花にあらマシを

(古今) 見る人もなき山里のさくら花外のちりなん後ぞ咲かマシ

マシは活用せぬ語である。然るに「明日香川しがらみかけてせかマセバ」(萬二)、「春行くとこそよそに見マシカ」(赤染衞門集)の如く用ひた例があるので、文法家の疑を招いたが、マセバはマシハの音便で、——原文も塞益者とある——マシカはマシヤといふと同義である。

口語では此助動詞は用ひられぬ。——敬語のマシは全然別語である。

メリ。 目アリの約で「見える」といふ意であるが、轉義により「ト思はれる」といふ意味にも用ひられるから、同じく推量の一助動詞と見るべきであらう。例

(古今) 立田川もみぢ亂れて流るメリ渡らば錦中や絶えなむ

(同) 知りにけむ聞きてもいとへ世の中は波のさわぎに風ぞしくメル

此語も亦口語では用ひられぬ。

(八) 強意

勉強スル、運動スル、熟スル、達スル、心スル、私スル、思スル、戀スルの如く、漢語、名詞又は名詞形に添付せられるスル(原形シ)は尙「作爲」の意の動詞と見ることが出來るが、「人にありセバ」「寢むと知リセバ」「山より來(キ)セバ」の如き用法に在りてはセには少しも「作爲」の意はなく、アラバ、知ラバ、來バといふと同義で、唯强意的なることを異りとする。さりながらセの原語がシなる事は疑はなく、上古アリと相並んで動態を表現する爲に用ひられ、有リシ、知リシ、來(キ)シの如き形の動詞が存在したものと思はれる。第二章活用語尾の項下にあげた知ラシ、行カシ等は恐らくは其音便で、土佐日記にも「此歌主また罷ラスといひて立ちぬ」と用ひた例があるが、尙、知リシ、行キシ、罷リシともいうた時代があつたのであらう。萬葉集に死ニスル(二卷)、飽カニセム(七卷)の如き用例が屢〻見えるのは其名殘であらねばならぬ。

見シガモ、見テシガモ等のシも之に屬するもので、過去助動詞でないことは次の例によつても明である。

(萬三) なかなかに人とあらズバ酒壺になりにテシガモ酒にしみなむ

(同二) まそ鏡見シカと思ふ妹に逢はヌカモ、玉の緒の絶えたる戀のしげき此ごろ

之を過去表示としては「アラズバ」及「逢ハヌカモ」と時格が一致せぬ。

動格に直接する用法は右の如く早く亡びて、片鱗を留めて居るのみであるが、助語トに連ねたトシは尙全活用を備へ、吹カムトス、有リトセバ、行クトシテ、心トスルの如く用ひられるのみならず、「といふ」「と思ふ」といふ意味をも寓するやうになつた。例

馬を鹿なりトス(「といふ」の意)

無きものトシテ(「と思うて」の意)

トシテは略せられてトテとなり、見ムトテ、聞カムトテの如く用ひられ、更にトテモ(迚も)といふ熟語を派成した。

口語ではトスをドス(京都地方)、ダス(坂神、中國)とも訛り、一般にはデスといふ。但し全活用を備へず、デシタ、デセウとは用ひるが、デセヌ、デスル、デスレバといふことはない。

此シの分詞形シテは打消の助動詞ズに連ねて見ズシテ、行カズシテの如く用ひることもある。ズは上表の如くズテ(分詞)と

も活用し得られる語であるから、シを挿入したのは強意の爲と言はねばならぬが、自餘の活用形を缺き、――上記の飽カニセムを飽カズセムといひかへた例もない――シテは宛ら一助語の觀を呈する。

右の如く動詞から分離したシテは直接又はニを介して體言に連用せられる。例

（應神紀）吾が心しいやをこニシテ

（萬一）これやこの大和ニシテは我が戀ふる紀路にありとふ名にあふせの山

（同三）旅にしあれば獨シテ見るしるしなみ

（同四）かくシテや尙やまからむ近からぬ道の間をなづみまゐ來て

「彌をこニシテ」の如き用法は「心靜ニシテ」「道遙ニシテ」の如く形容詞に於て多く之を見る。「之を久クシテ」「風寒クシテ」等も形容詞の分詞形に此シテが連ねられたものである。シテは約せられてテ（デ）となり、大和ニテハ、獨デ、かくテの如く用ひられ、ニテを更に約してデとし、大和デハともいふ。此デは全く助語化したものであるから、次章に於て再述する。

附記。「人シテ聞かせ」「使シテ言はしむ」などのシテも亦此用法に屬するものと見なすことが出來るが、「人ニ聞かせ」「使ニ言はしむ」といふのが古語法で、シテを用ひるやうになつたのは「令ニ人謂ヒ之」等の如き漢文訓讀から出たのであらう。

（ニ）使動

他の者に動作行爲を實行せしめることを表現する語法を使動法といひ、次の三語が供用せられる。

セ。 動詞シ（爲）の命令法で、ナセといふ意であるが、既記の如く接尾語としても用ひられ（第二章動詞語尾の項下參照）、獨立した一助動詞としては常に四段活動詞の未來分詞形に連る。例、行カス、啖カセン、讀マスレバ

サセ。 動詞シの未來分詞形サ（通例セと轉呼せられる）に右のセを連ねたもので、二段及一段活動詞の原形に連ねて、得サセ、落チサス、棄テサスレバの如く用ひられる。一語音より成る一段活動詞は既記の如く接尾語セを接着した見セ、着セ、似セの如き動詞を分派し、使動の意に用ひることを例とするのであるが（第二章參照）、口語に在つては得サセに准じ、見サス、着サス等といふことがある。

シメ。 斷言は出來ぬが、上古動詞シ（爲）に接尾語ミ（見）を連ねたシミといふ語がナシ見ルといふ意に用ひられたことがあつて其命令法なるシメが獨立して使動助動詞となつたのではあるまいか。――「日本言語學」に述べた鄙說は誤つて居たやうに思ふ――古書にも次のやうな用例がある。

（萬三）佐保すぎて奈良のたむけに置くぬさは妹を目かれず逢見シメとぞ

（萬五）布施おきて我はこひのむ欺かず直にゐゆきて天道知らシメ

（萬二〇）あしびきの山行きしかば山人の我に得シメし山づとぞこれ

（古今序）事につけつつ歌を奉らシメ給ふ

（續紀詔）一二ノ國ニ軍丁ヲ乞、兵發之武

（同）大臣人位ニ仕奉之武流

口語では右のサセに准し、一語音の語に在つてはシに代へるにセシメ（令爲）を以てし、見セシメ、得セシメの如く用ひることもあるが、尙見シメ、得シメを正しとすることは勿論である。

使動法としてセ（サセ）、シメを用ひる場合、其動作行爲の實演に任ずる人事物を表示することを必要とするに於ては、之を副位に配置する爲め、上述の如く「人ニ聞カセ」「人シテ棄サセ」「人ヲシテ言ハシメ」の如く、ニ、シテ、ヲシテといふ助語を用ひる。

附記。使動法が敬語に轉用せられることについては次目の敬語法の項下に記述する。

（ホ）可能（受動）

助動詞エ（得）又は其から轉化したレを他の動詞に連用する場合にはエの原義にもとづき其動作行爲の可能なることを表示する。例へば行カエ（行カレ）は「行き能ひ」といふ意になるのである。然るに人ニ行カエ（行カレ）といへば他の者の動作行爲を主語（其が明示せられて居ると否とに拘はらず）の立場から述べたことになる。此表現法は一般に受動と稱へられて居るが、西洋文法のpassiveとは異り、主語が直接其動作行爲をしかけられるのではないから、行クの如き自動詞も亦之に用ひられるのである。――西洋語のパッシーヴ（受動）は他動詞に限られて居る。――可能法が之に轉用せられるのは上例を以ていへば「其人ニ行くことが可能なり」といふ意になるからで、實演者が助語ニを添へた補足格の形を以て表示せられるのも此故である。近來「强壓手段が政府ニヨツテ行ハレタ」といふやうに更にヨリテといふ言葉を加へることもあるが、其は寧ろ西洋語法の模倣であ

るから、「人ニヨツテ行カレタ」「子ニヨツテ泣カレタ」とは決していひ得ぬ。いづれにしても實演者は必ず明示又は暗示せられることを要する。

此語法は又敬語にも轉用せられることがあるが、其說明は次目に讓り、こゝには此助動詞の性質及用例を述べるに止める。

エ(ラエ)。動詞エ(得)は今ではア行に活用せられ、エ、ウと變化するが、古はヤ行下二段活に用ひらたことは之を接着した諸動詞の例によつても明白である(第二章動詞語尾の項下參照)。可能を意味する助動詞となつたのは其原義に基づくもので、現代語に於ても行キ能フを行キ得ともいふのであるが、助動詞としては常に四段活動詞の未來分詞形に連ることを異りとする。受動法には之から轉用せられたものであることは既述の通である。例

(可能法)

(齊明紀) 山こえて海渡るともおもしろき今木のうちは忘ラユましじ

(萬五) 漁する海人の子どもと人はいへど見るに知ラエヌうま人の子と

(受動法)

(萬五) かく行けば人に厭ハエ、か行けば人に憎マエ

(同七) 我が宿に生ふる土榛(ハリ)こころゆも思はぬ人の衣にすラユな

其外「音のみし泣カユ」「家し偲バユ」(可能)等の例が少くはないが、中世以降後記のやうにエ、ユはレ、ルと轉呼せられ、今ではイハユル(所謂)、アラユル(所有)の如き熟語に其俤を留めて居るのみである。

エは上記の如く未來分詞形に連るものであるが、二段及一段活動詞には此形を缺く爲に直接之を連結することが出來ぬので、助動詞アリの未來分詞にエを接着したアラエを畧してラエとなし、原形に連用する。例

(萬一五) 妹を思ひいの寢ラエぬに秋の野にさをしか鳴きつ妻思ひかねて

右の外、用例は見えぬが、見ラエ、落チラエ、棄テラエの如くもいひ得た筈である。

レ(ラレ)。上記エ(ラエ)の轉呼である。ヤ行が音便によりラ行に轉ずることは既に第一章に述べた通で、轉訛の起つた時代は判明せぬが、萬葉集にも見え、古今集以下には專ら此形のみが用ひられて居る。例

(可能法)

(古今) 月夜には來ぬ人待タルかき曇り雨も降らなむわびつつも寢む

(同) 忘ラルル時しなければ蘆たづの思ひ亂れて音をのみぞ鳴く

(同) 春毎に流るる川を花と見て折ラレぬ水に袖やぬれなむ

(同長歌) けなは消ぬべく思へども尙歎カレぬ

(大和物語) 見も見ずも誰と知りてか戀ひラルルおぼつかなみの今日のながめや

(受動法)

(古今) 惜しと思ふ心は絲によラレなむ散る花ごとにぬきて留めむ

(同) 雲もなく風きたる朝の我なれやいとハレテのみ世をや經ぬらむ

(百人一首) 忘ラルル身をば思はず誓ひてし人のいのちの惜しくもあるかな

ラレ(ラル)の形は上記ラエ(ラユ)に相當し、一段及二段活動詞に連る。されば忘レは忘レラレといふべきであるが、忘ラレと用ひられるのは此語の原形がワスリで、上古四段活であつた名殘である。

(ハ) 打消(禁止)

打消を表示する原語はナ(莫)である。これは「雲ナたなびき」「雨ナ降そね」「忘ると思ふナ」の如く、動詞の上にも下にも連ねて禁止的語法を表示する一體言で、今も行クナ、見ルナの如く用ひられるが、此から次の三語が分派せられた。

原形	動格	已然格	未然格	分詞
ニ	ヌ	ネ	ナ	
ナヒ	ナフ	ナヘ	ナハ	
ナシ	(a)ナシ (b)ナキ	ナケレ		ナク

ナヒは萬葉集の東歌にのみ見える打消助動詞で、其當時東國に普く行はれて居たものと思はれるが(語誌)、今では全く廢用となり、ナシは口語に於ては後記の如く助動詞として用ひられるが、本來は形容詞であるから、上代の大和語に使用せられたのはニの一種のみであつた。然るに外來語なる後記のズ、ジが弘通するやうになつてから、ニ、ナの兩形は殆ど廢れズ、系とナ系とが混用せられる外に、ズから出たザリの活用も加はつて、左記の如く一種特別の樣式を備ふるものとなつた。

原形	動格	已然格	未然格	分詞
ズ	(a) ズ	ジ	ズテ	
ニ	(b) ヌ	ネ	ナ	
ザリ	ザル	ザレ	ザラ	

時格活用の爲め他の助動詞を之に連用する場合には主としてザリの形が用ひられ、ニ、ズは古語に其用例を求め得るのみで、未然格のジ、ナも亦希用である。尙此外にジからマシジ（マジ）といふ助動詞が分派せられた。

右の如く打消の助動詞は極めて不規則なもので、一律に說くことは不可能であるから、以下各形について說明する。

ニ。 記、紀、萬葉集には尙此ニが打消として用ひられた例がある。左に其二、三を擧げる。

（記水垣宮）前つ戸よい行きたがひうかがはくシラニト御間城入彥はや――紀には「すまくをシラニひめなそびすも」とある。

（萬二）せむすべシラニ戀ふれども逢ふ由をなみ

（萬一七）梅の花みヤ山としみにありともやかくのみ君は見れど飽カニせむ

（同二〇）しろたへの袖なきぬらし携はり別れカテニト引きとどめ

右の外シラニ（不知）、アカニ（不飽）、カテニ（不克）、といふ言葉は屢々見えるが、――カテニは從來「難ニ（ガタ）」と誤讀せれて居るけれども、ガタ（難）は形容詞語幹であるから、ニに續けて用ひることは出來ぬ筈である――終止法に用ひた例はないから、ニが動詞原形（所謂連用形）であつたことは明白である。但し用例の限定せられて居る所を見ると、一般に通用せられたのではなく、熟語として萬葉集時代まで殘つて居たのであるかも知れぬ。

シラニトといふ用例は萬葉集にも見える。卽ち

（萬三）かも山の岩根しまける吾をかもシラニト妹が待ちつつあらむ

（萬四）追はむとは千度おもへど……すべをシラニト立ちてつまづく

之を第一七卷の「そこも飽カニト」、第二〇卷の「別れカテニト」と照し合はせて考へると、トは分詞語分子テに通ずるもので、後世の言葉に直せば知ラズテ、飽カズテ、克（カ）テズテである。先學之を解きかねてトについて率强附會の辯を弄したが、分詞語分子テの原語がトであることは旣述の通で、ト、テを通用した例は珍しからぬことである（次章トの項下參照）。

ナ。 上記助動詞ニの未來分詞形（未然格）としては上古ナが用ひられたやうであるが、夙に廢れて知ラナク、言ハナク、飽カナク、克テナクの如き熟語に於てのみ名殘を留めて居る。此ナクのクが「此」を意味する接尾語（又は助語）であることは勿論で、シラク、イハクの如く常に未來分詞形に連ねて用ひられるものであるから、ナも未然格であつたことが立證せられる。東歌、防人歌に屢々見える「忘れはせナナ」「我手觸れナナ」等のナナも大和語に直せばジナであるから（語誌）、ナ、ジは同値であつたとせねばならぬ。

ヌ。 此形は終止法として今も用ひられるが（關西地方ではンと訛る）、文語では後出のズと併用せられる爲め、二段活動詞の動格b型に准じ、主として連體法に用ひられる。關西地方では此ヌをンと訛り、關東では之に代へるに形容詞ナシを以てして知ラヌ（知ラン）を知ラナイ、見ヌ（見ン）を見ナイといひ、ナカリ（ナク、アリの約）の形を以て活用する。

ネ。 打消の已然格である。文語ではザリの已然格ザレをも併用し、知ラネド、見ネドを知ラザレド、見ザレドともいふが、口語では古にかへり、專らネの形のみを用ひる。

ズ。 中央カロリン語のセ、マーシャル語のジャ又はジェと語原を同うする外來語である。――拙著「中央カロリン語の研究」及「マーシャル語の研究」參照――固有の打消助動詞ニ、ヌは完了助動詞のニ、ヌと紛らはしいので、大和に於て夙に此語が採用せられたものと思はれる。原語は無變化（音便の外）の體言であるから、ニ、ヌは勿論、ナにも代用せられたのであるが、未然格を示す爲にジと變化させ、更にザリといふ語を派成したことは後記の通りである。ズは今も文語として用ひられ、よく知られて居るから、左に異例のみを記述する。

ズケリ。 古歌には往々ズケリといふ助動詞及其變形が用ひられて居る。例

（仁德紀）根白の白腕（タナムキ）まかズケバこそ知らずともいはめ

（萬八）梅の花折りも折らずも見つれども今夜の花に尙しかズケリ

（同一〇）奈良山の峯さへ霧（キ）らふうべしこそま垣の下の雪は消ズケレ

（同二〇）ときどきの花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出來ズケム

右の外「戀やまズケリ」「見れど飽カズケリ」「待てど來ズケ

リ」「いまだ咲カズケル」「いの寢らえズケレ」の如き用例がある。此ズをザリに代へると過去繼續格になるが、右の用例によれば過去表示に用ひられたものとは思はれぬから、恐らくはナの代りにズを充てたので、無ケリ(無ク、アリ卽ちナカリの古語)と同義であらう。されば上例の如カズケリは梅花も尙愛人の容色に如カ無クアリといふ意、消ズケレは籬の下の雪は消えナイといふことである。萬葉集十七卷逸應の歌の反歌に「さ山田の小父(ヲヂ)が其日に覓めあらズケム」とあるのは逢ハザリケムの意に用ひられたのであるが、他に例のない所を見ると、其當時此やうな言葉づかひが弘通したかは疑問で、或は家持の誤用であつたかも知れぬ。

ズバ。 右の如くズは打消のナ(未然格)にも代用せられたので、助語ハを連ねて假定條件を表示したことは勿論で、古今集にも「散らズバありとも花と見ましや」の如き用例があるが、萬葉集にはアラムヨリハといふ意を以て此言葉を使用した場合が多い。例

(萬二)おくれ居て戀ひつつあらズハ追ひしかむ道の隈回にしめ結へ吾が背

(同)かくばかりこひ乍(ツ)あらズバ高山の岩根しまきて死なましものを

(同二)中々に君にこひズバ平の浦の海人ならましを玉藻刈りつつ

此熟語は恐らくはザラム・サラバといふ意で、ズは未來時格に用ひられたのであらう。——サラバの意をハ一音に含ませることは有り得べきである。——此當時は既にジといふ變形も發生して居たのであるから、正しくはジバといふべきであるが、音便の爲め原形を用ひたものと思はれる。

ズテ(デ)。 ズはニにも代用せられるから、シラニテ(上記の如く音便によつてシラニトと轉呼せられた)の代りにシラズテといひ得たことは勿論である。强意の爲め既記の如く知ラズシテとも用ひるが、尙ズテが尋常の樣式であつたことは古歌の用例によつても明である。其例

(萬五)人皆の見らむ松浦の玉島を見ズテや我はこひつつ居らむ

(同八)吾が宿の尾花がうれの白露を消たズテ玉にぬくものにもが

平安朝以降はズテを約してデとし、或はナクテをナデと轉呼して用ひた。例

(古今)みるめ刈るわが身を浦と知らねばやかれナデ海人の足たゆく來る

(百人一首)やすらはデ寢なましものをさ夜ふけて傾むくまでの月を見しかな

口語では此場合知ランデ、知ラナイデといふが、知ラズテ、知ラナクテの音便なること勿論である。

ジ。 上記の如くズの變化で、專ら未來時格の表示に用ひられる。例

(萬七)南淵の細川山にたつまゆみ弓づか卷くまで人に知らえジ

(古今)宿ちかく梅の花うゑジあちきなく待つ人の香に誤たれぬる

此變形は口語では全く廢れ、後記のマジがマイと轉呼して代用せられる。

マシジ。 既記の推量の動詞マシに右のジを連ねたので、打消の推量である。之を肯定語法と對比すると次のやうになる。

	純未來	推量
肯定	知ラム	知ルラム
否定	知ラジ	知ルマシジ

此語法は夙く廢れたが、尙古典には次の如く假字書した例がある。

(續紀詔)遍重(タビ)テ敕ドモ敢(カツ)末之時止爲テ

(齊明紀)今木のうちは忘らゆ麻旨珥

(萬四)此月ごろも有勝益士

(同七)邊にもおきにも依勝益士

(同一一)戀のまされば在勝申自

(同二〇)あらたまの柵(キヘ)戸の林に汝を立てて由吉可都麻思自

然るに釋紀は齊明天皇御製をマシニと訓し、萬葉集のも二卷に在勝申目と書いた一例があるによつて自は皆目の誤寫としてモと訓み、士はヲと訓したものがあり、ニ、モ、ヲはいづれも感動詞であると說明せられたが、橋本進吉敎授によつて其誤が正され、二卷の目は自の誤として盡くマシジと改訓せられた。

マシが未然格に連るに反し、其から出たマシジは上例の如く常に動格を受けるのは異樣であるが、恐らくはマシジが獨立した動詞と見なされた時代があつたからであらう。

マジ。 上記のマシジの約言であるが、マシジが無變化であるのに反し、マジは形容詞語尾キ(ク、ケレ)をそへて活用せられ

る。例

（仁德紀）よるマジキ川のくまぐま

（萬七）まかなもち弓削の河原の埋木のあらはるマジキこと

とあらなくに

右の外「爲マジク思ふ」「有るマジケレ」の如くも用ひられる。口語では雨は降るマイ、忘レマイゾ（マジキゾ）の如くマジ、マジキ共にマイと轉呼せられる。

此語も亦動格に連用すべきもので「冬も堪ヘマジ」（夫木）の如く用ひるのは誤である。

ザリ。 ズにアリを連ねたもので、ズを直接助動詞に連用する古語法が廢れた結果、之に代用せられて時格活用の基礎となつたのであるが、本來繼續時格に相當するものであるから、ザリ、ザルが單獨に用ひられる場合にはズ、ヌとは聊か表現を異にする。例へば「未だ咲かザリ」は「咲ケリ」の打消で、咲クの否定形卽ち「未だ咲かズ」とは同義ではない。又「知ラザルこと無シ」を正しく口語に譯すとせば「知つてヰナイことはない」といはねばならぬ。咲カザリ、知ラザリなどを咲カズ在リ、知ラズ在リと同一視することも亦誤で、此は「在」が動詞として用ひられたのであるから、ズ、在リをザリと約することは出來ぬ。次の證歌は此差別を明示するものである。

（萬三）いつはなも繼ひズアリとはあらねどもうたて此ごろ戀のしげきも

（萬七）沖つ波來よらザリせば失せざらましを

（ト）必然

助動詞ベシは「必然」を意味する。此語はウベ（宜）、ナベ、アベ（敢）等の語幹べに接尾語シを連結した形容詞で、此外に「折らば散るベミ」（萬八）等の用例によれば、ベミといふ動詞もあつたやうであるが、活用せられた形跡はなく、必然（當然）の意の助動詞としては專らベシのみが用ひられる。例

（允恭紀）我が背子が來ベキよひなりささがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも

（萬七）波高しいかに楫とり水鳥のうき寢やすべき尙や搒ぐベキ

（古今）こりずまに又もうき名は立ちぬベシ人憎くからぬ世にしすまへば

必然の意はやがて「多分さうであらう」といふことにもなる。次の歌の如きは其例である。

（古今）なき名ぞと人にはいひてありぬベシ心の間はばいかに答へむ

「明日は風吹クベシ」「色黑カルベシ」「然ナルベシ」等のベシも之に屬する。

此意味から轉じて話者自身のことをいふ場合には意嚮の表示となり、相手又は第三者についていふ場合には命令にもなるのである。例

（命令）速に行フベシ　徐行スベシ

（意嚮）尙考フベシ　汝を再見ザルベシ

（チ）比況

或る言葉を比況卽ち譬に用ひる爲には今では「月ノヤウニ赤い」「月ト燿く」「月のゴトク照る」などといふが、ヤウニといふ言葉は古語には存せず、――恐らくはサマ（狀）といふ意の漢字「樣」の音から出た語であらう――ゴトクはゴトとのみも用ひられた。ゴトがコト（事）と同語から分化したものなることは勿論で、コトはト（事物を意味する原語）から出た語であるから（語誌）、トが「如」と同義に用ひられることは不思議ではなく、モノ（物）の原語ノが次の例の如く比況の用に供せられるのも當然のことである。

（萬三）秋山の木下がくりゆく水ノ吾こそまさめみおもひよりは

（古今）夕月夜さすや岡邊の松の葉ノいつともわかぬ戀もするかも

右の外ノを「ノやうに」の意に用ひた例は古歌には極めて多い。

ノ及コトは「物」「事」の意から見ルノ（は）、行クノ（を）、見ルコト、行クコトの如く動詞から抽象名詞を作る語分子として用ひられ、同じ趣旨を以て比況の表現にも轉用せられたのであるが、コトは通例ゴトと濁音に發音せられ、且助語ノ（ガ）を介して花ノゴト、見ルガゴトの如くも用ひられる。此ゴト及ノに形容語尾シを連ねて、比況を意味する左記の二助動詞が分派せられた。

ナス。 ノシの轉呼で、東歌には「小檜ノス」「波に逢ふノス」のやうに、ノスの形が用ひられて居るが、大和語ではナスと轉呼せられた。例

（記上卷）くらげナスただよへる時

（萬一）へそ形の林の先のさ野榛の衣につくナス目につく我が背

右の外「鏡ナス」「玉藻ナス」の如く枕詞の語尾としても用ひられる。此語は形容詞ではあるが、キ（ク、ケレ）の接尾した形が

ないので活用せられなかつた。――「白珠を手にとりもちて見るナスも」〔萬一四〕は「見る如モ」の意で、ナスは述語として用ひられたのではない。萬葉集の舊訓にはナセルと點したものもあるが、其は誤讀で、ナスは四段活に用ひられるものではない。

ゴトシ(如)。 形容詞と同樣に活用せられる。例

(萬三)世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎにし舟の跡なきゴトシ

(同五)年月は流るるゴトキ腰細に取かざらひ

(古今)我がゴトクものやかなしき時鳥ときぞともなく夜ただ鳴くらむ

文語としては今も普く用ひられるが、口語ではヤウを專用する。但し九州方言に於ては語幹にアリを連ねたゴトアル又は其約のゴタルが行クゴタル、見ルゴトアルの如く用ひられる。

四、敬語

ミ(御)、オホミ(大御)、オ、オン、ゴ(御)等の美稱が敬意を表する爲め接頭的に用ひられ、活用語尾シを接着した行カシ、聞コシ等が敬語となることは既に第二章に述べた通であるが、敬語に專用せられる動詞、助動詞は少く、古語に於ては左記の三語が其用に供せられ、いづれも四段に活用せられた。

マシ(坐)。 ミ(御)シ(爲)の轉呼であるが、轉じて存在を意味する敬語としても用ひられたので〔語誌〕、「坐」の字を充てるのである。但し口語に於て行キマス、見マシタの如く用ひられるマシは後記の如く全然別語である。

メシ(召)。 メ(目)はミ(見)の原語で、メシは見シ(見マシの意)と同じく「見たまふ」といふ事であるから、敬語助動詞に轉用せられたのであらう。 例 知ロシメス、聞コシメス

ヲシ(食)。 口にするといふ意の敬語で〔語誌〕、「あさずヲセささ」〔記神功皇后の御歌〕の如く、「食」の意の動詞としても用ひられたが、敬語にも轉用し、聞コシメスを聞コシヲスともいうた。此用法は夙く廢れたが、之に接頭語マを冠したマヲシは申(白)の義となり、更に敬語にも轉用せられるやうになつた。此語は中世以降マウシと訛り、更に約せられてマシとなり、有リマシタの如く今も常用せられる。之を上記マシ(坐)の轉義とする說もあるが、用法上にも相違があり、今も陸奥地方では有リマウシタの如く發音せられるから、マウシの約と見るべきであらう。

既記の使動法及可能法も亦後世敬語的に用ひられるやうになつた。例 (大槻氏廣文典よりとる)

御位に卽カシメ給ふ

行幸セシメ給ふ

先づ其方から行カシメ〔狂言〕

君も殊に喜バレて

御笛賜びて吹かせラレける〔宇治拾遺〕

右は使動及可能法の本質上有力者の動作行爲を表現するに適するものとして轉用せられたのであらう。レ(ラレ)の形は口語に於ても、「東京へ行カレタカ」「よく見ラレイ」の如く用ひられる。但し「位に卽カせらる」の卽カセ等は使動法ではなく、ツキの敬語卽ちツカシの音便とおもはれる。されば「大御位に卽カセム」とも「卽かスレバ」とも用ひることはないのである。「民の心を得サセ給ふ」などいふのも同じ語法から出たのであらう。

現在文語、口語を通じて敬意を表示する爲に、助動詞的に用ひられるものは左記の諸語で、他に對すると自分のことをいふものとに區別することが出來る。――上段と下段とは必しも匹偶をなすものではないが、略〻其に近いものを對立させたのである。便宜上終止法を以て記載する。

他用		自用	
マス(坐)		ハベル(侍)	
マシマス(坐々)		サモラフ(候)――サブラフ	
オハス(御坐)		コザル(御坐)	
メス(召)		アゲル(上)	
タマフ(給)		タマフ(賜)	
アソバス(令遊)		ツカウマツル(仕)	
ナサル(被成)		イタス(致)	
クダサル(被下)		タテマツル(奉)	
入ラセラレル		マキル(參)	
仰セラレル		マヲス(申)	

右はいづれも四段に活用し、其已然格(命令法)は請願又は勸告の意に用ひられる。例

還御マシマセ　聞コシメセ　立チオハセ

御覽遊バセ　治メタマヘ　御聞ナサレ(イ)

御出下サレ　行キマセ

上記の外口語に於ては左の二語が敬語助動詞として常用せられる。

マス。 此語は上記の如くマウス(申)の約言と思はれるが、サ

行變格に活用せられる。例

有リマセン　有リマシタ　致シマス
致シマスレバ　願ヒマセウ　遊バシマセ

デス。　強意を表示するトスの轉訛であることは既述の通であるが、私デス、其(ソウ)デシタといへば私デアル、ソウデアツタといふよりも鄭重な言葉づかひと了解せられる。

五、呼應

動詞の用法は前章動詞以下の諸目に述べた所と本章の上記三目に於て盡されて居り、之と次章の助語とを正しく用ひるに於ては心に思ふ事を遺憾なくいひ表はし得るのであるが、文に在つては(口語文と文語文とを問はず)動詞の用法に上記以外の若干の法則があり、若くはありと誤信せられたものがある。本篇には作文の爲に特別の一章を設けぬから、茲に之を附記する。

一語のみを以てしては話者の意志が判明せぬことがある。例へば吹クといふだけでは風が吹ク(自動)ことをいふのか、火を吹ク(他動)ことか不明であり、後の場合としても吹クものは誰か、いつのことかといふ疑が解決せられぬ。其故にまとまつた意志は多くの場合若干の單語を連ねて表現せられる。古語では之をコゴト又はコトドというたのであるが(語誌)、通例「文」といふ漢語を以て呼稱せられ、――英語では之をセンテンスといふ――第二章に揭げた語排列の原則に從ひ、所要の單語を連用する。從つて西洋語のやうに込入つた約束は國語には存在せぬのであるが、口頭に於ては語を省略し、或は排列の順序をかへても意志の疏通が可能であるので、之を其儘文字に寫すと誤解を招く虞があることがある。例へば息せき切つて駈けつけた人の口から「水」といふ一語を聞けば、何人も「水をくれ」というたものと了解すが、其光景を叙述せぬ限り、「水」だけでは文としては意が通ぜぬ。又昨日雨が降つたいふことを「昨日降つた、雨が」というても其事實を知つて居るものにはよく判るが、さうでないと「昨日降つた」が「雨」の修飾と誤解せられることがないともいへぬ。口頭ならば如何なる言ひ廻はしをしてもよいといふ譯ではなく、誤解の起らぬやうに明晰且、巧妙に意志を述べることは文明人の面目からいうても必要で、口をついて出る言葉が其儘正しい文になるやうに修練を積まねばならぬ。其曉には眞の言文一致を見るのであるが、今日のやうに意志さへ通ずれば言語の用が足ると考へられて居る時代には、口頭語と文章語との間に少からぬ相違のあるのは已むを得ぬこと

で、「文」は文字にかき表はされた言葉といふ意味にも了解せられ、口語文といふ一體をすら生じたのである。

口語文と文語文との相違は主として動詞及助語の變革に因するもので、文の本質又は構成上に差別があるのではない。其故に正しい口語文中の助語及動詞を文語に改めると其儘文語文になる。例へば

風は吹かナイデモ葉は落チル

といふ文を直すと

風は吹かズトモ葉は落ツ

となる。即ちナイデモがズトモとなり、落チルが落ツトといひ代へられる外、何等相違はないのである。之と同樣に文語文を口語文に直すにも助語及動詞を代へるだけですむ場合が多い。

例

人こそ知ラネ乾く間もナシ――人こそ知らナイガ乾く間もナイ

然るに先學が誤まつた觀察の下に係り結びといふ法則を揑造したが爲に、作文は甚しく制肘せられるやうになつた。其は既述の如く文語の終止法の三形(四段及一段活にあつては二形)の使ひ分けを先行助語(又は疑問代名詞)の影響によるものと誤解した結果で、宣長は其著「紐鏡」及「詞玉緒」に於て次の如く規定した。

先行助語	終止語
は、も、徒(タダ)	第一形
ぞ(なん)の、や、何	第二形
こそ	第三形

故大槻文彥博士は此を缺陷ありとして第二終止法はゾ、ナム、ヤ、カの結び、第三終止法はコソの結びと定め、之に屬せざるものを總括して「尋常の結法」とよび、第一終止法を用ふべきものとした。即ち宣長說と相違する主なる點は第二終止法の係り中からノ及「何」を除き、カを加へたので、其理由は廣日本文典別記三二六節以下に詳述してある。さりながら前章に述べた動詞發達の沿革及本章通則によつても明白なるが如く、文語に二種乃至三種の終止形があるのは決して先行助語(及疑問代名詞)に對應する爲に設けられたのではない。用例から逆推すると、宣長が指摘したやうな結果になる場合の多いことは事實であるが、其は此諸形の性質が然らしめたので、慣用(後代の歌文に在つては誤解、模倣)もまた之が一因となつたのである。左に第二、第三終止形を用ひる場合の所謂係りについて逐一考察を加へる。

ノ。 此助語の先行する場合第二終止形で結ぶのは殆ど歌詠のみに限られ、述語の終尾にあるべき感動詞を略して餘韻を殘したのである。さればノの結びに第一終止形を用ひた例も極めて多い。此事は既に大槻翁によつて說破せられたから省略する。

何、カ。 疑問代名詞が終止法の形式を支配するものでないことは大槻說の通であるが、同氏が之をカの影響によると斷じたのも亦誤解である。カには感動詞と助語との二種があり、語間に挿入せられるものは多くは感動詞であるから、問を表現する爲には句末にカを添付すべきであるが、語勢上之を略して連體法を以て標識したのである。「現(ウツツ)にカ妹が來ませる」のやうに疑の助語が句中に位するのは來ませるハ現にカといふべきを倒叙してハを省いたもので、律調の關係上歌詠に最も多く用ひられる常套手段である。――本章通則疑問法及次章カの項下參照。

ヤ。 疑問助語としてのヤは其本質上決して語間に挿入せられることはなく(次章參照)、句中(語間)に位置するのは盡く感動詞のヤであるから、疑問を表示する爲には句末にカを添付すべきであるが、歌詠に於ては之を略して「浮寢ヤすべき尙ヤこぐべき」の如く連體法を以て終止する事を例とする。さりながら其はヤがある爲ではなく、「浮寢ヲすべき尙モ漕くべき」というて疑問句たることを失はぬのである。

ゾ。 ソは指定の意を有し、カと同じく本來名詞又は連體法を受けて述語を構成するに用ひられる一助語であるから(次章參照)、別に主語の存することを原則とする。例

(記神代卷)「あな玉は」や三谷二わたらすあぢしき高彥根の神ソヤ

(同詞志比宮)「この御酒は」……まつり來し御酒ゾ

國語に於ては主格は必しも明示せられるものではないが、尙裏面に潛在する。例へば

(古今)いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物おもふころゾ

(同)「言に出でていはぬばかりゾ」みなせ川下に通ひてこひしきものを

の如きは前者は「とがめそ」の次に「今は」といふ言葉を加へて聞くべきもので、後者に在りては「我は」といふ主語が潛んで居るのである。

然るに慣用上主賓を倒置して「風吹かむとソ木の葉さやげる〔記中〕の如く叙することがあるが、其は「風吹かむとソ木の葉さやげるハ。」といふべきを、ハを略したのである。宜長のあげた係り結びの證歌にも明に倒叙と解せられるものが少くはない。例

(古今)「山かくす春の霞ゾうらめしき(ハ)」いづれ都のさかひなるらむ

(同)さくら花とく散りぬとも思ほえず人のこゝろゾ風も吹きあへぬ(ハ)

此慣用法からニザリケル(ニゾアリケルの約)の如き熟語を生じたのであるが、口語では尙ソは常に句切に用ひられる。

ナン(ナモ)。 此語は既記の如く一個の感動詞であるから(第三章其項下參照)、間投詞的に之を用ひた場合、述語にも亦感動の意を含ませた連體法が用ひられることは敢て奇とするに足らぬ。之をゾと同義の指定語なりとする舊說の安なることは既に述べた通である。

コソ。 ソよりも一段强く指定する語であるから、之を用ひた句には決定的(コンクリユシーヴ)の述語を用ひねばならぬやうな場合が多いのであるが、絕對的の條件ではない。其故に古歌には「もとも今コソ戀はすべなき」〔萬二〕「おのが妻こそ常めづらしき」〔同〕「時雨と共に降りてコソ來シ」〔後撰〕の如く第二終止形を用ひた例もあり、或は「見えずとも誰こひざらメ」〔萬三〕「我がせこをいづく行かメと」〔萬七〕のやうにコソなくして第三終止形で結んだ例もあるのである。第三終止形の本質が忘れられた後には、コソといふ語があれば必ず之を用ひねばならぬと心得たものも多いやうであるが、尙ヲ、ニ、トモの如き助語によつて次の句と接續せられる場合には第三終止法を用ひぬ例が少くはない。範にすべきほどの名歌ではないが左に其二、三をあげる(「詞玉緒」による)。

(續古今)下にコソ人の心はうつらふヲ色に見せたる山さくらかな

(躬恒集)明ぬればつれなくなりぬ女郎花人しれずコソ折らんと思ふニ

(千載)姿コソねさめの床に見えずトモ契りしことの現(ウツツ)なりせば

口語でも「其コソ大變だ」(デ、アルの約)「今日コソ行つて見よう」「盜コソせぬが」といふやうに用ひられるのである。

上述の如く係り結びの法則と稱するものは何等理由のない幻想で、論理の命ずる場合の外範とするに足らぬものである。其故

に口語に於ては勿論、文語就中歌詠に在つても之に拘束せられる必要は少しもなく、唯一種の慣用語法と見ればよい。

右の外或種の副詞に對して之に相當する述語を必要とすることがあるが、其は論理的歸結で、特種語法と見ることは出來ぬ。例へば「いざ見に行きシ」「既に行カム」とは語義上いひ得ざること勿論である。

之に反し一文中同一事項に關する動詞は必ず呼應せねばならぬ。換言すれば相當の時格、同樣の語法を用ひることを必要とする。例

我が見シ時は尙蕾なりキ。
花咲カバ見に行カム
見トモ飽カメヤ
人に憎マレ人に笑ハレ
衣着セマシを大刀佩ケマシを

此も亦當然の理論であるが、込入つた文になると、此呼應を誤り易いから注意せねばならぬ。訓詁の部に指摘したやうに、古事記、萬葉集の在來の訓にも此種の誤謬は少くはない。

思想の幼稚なものは同一事項について語るにも切々の文を用ひる。例へば動物園で何を見たかといふ問に對し大人ならば「猿、虎、象を見た」と答ふべき場合に、小兒は猿ダノ、虎ダノ、象ダノといふ。此は猿デアル、虎デアル、象デアルといふ三つの文をノで接續したので（前章接續詞の項下參照）、切々の文を以て表現する結果、接續詞が必要になるのである。「電車に乘つた。さうして上野へ行つた。而して動物園を見た」といふ表現も「電車に乘つて上野に行つて動物園を見た」といへば一文に收まる。更にいひかへると、「電車に乘り、上野に行き、動物園を見た」となる。前者は乘り、行キといふ語を副詞形にして接續したので、古語にも見える語法であるが、日常文としては稍煩はしい感があるので普通の文には多くは後の形式が用ひられる。此場合乘リ、行キはいづれも最終助動詞タ（タリの約）にかゝるので、動詞の原形――大槪文典には中止法といふ名が與へられて居るが、中止といふ語は穩でない樣である――之に用ひられるのは活用の基礎形であるからであるが、尙次のやうに未然格、已然格から連るべき助動詞と呼應する場合にも原形が用ひられる。

花咲キ、鳥も歌はム
松も引キ、若菜も摘マズなりぬるを〔後撰〕
月は漏リ、雨はとまれ

此語法は助動詞に連る場合ばかりではなく、行き還ル人（行ク人、還ル人）、見、聞ク限（見ル限、聞ク限）、上リ下レド（上レド、下レド）の如く名詞、動詞、助語等を以て承けるにも適用せられるから一種の省語法と見るべきである。

第五章　助語

一、通說

意志表示の爲め二つ以上の語を排列する場合、原則としては何等の仲介をも必要とせず、花見ル、風吹クといへば直に花ヲ見ル、風ガ吹クと了解せられたのであるが、時としては誤解を招く虞がある場合がある。例へばニハ（庭）ハナ（花）といふ二つの語が相踵いで耳に觸れた刹那、直に起る疑は庭ノ花のことをといふのか、庭デ花がどうかしたのかといふ事である。風立ツいうても次の語によつては風ニ立ツ塵の如く、タツが風の述語にならぬ場合もある。又或る二語が互に連絡するものとしても其相對關係は一樣ではない。ヒ（日）ツキ（月）といへば兩者對等の位置に立つことを意味し、クロ（黑）コマ（駒）に在つては前行語は後續語を形容するもので、カム（神）タカラ（寶）の如きは所有關係を表示する。又上例花ミル、風吹クの前續語は目的格若くは主格であるが、雲ガクレといへば隱レといふ動詞の補足格として「雲」が用ひられたのである。時としては同じ二語の排列が數樣の意味に了解せられることもあり得る。例へば人見ルといへば人ガ見ルことにも、人ヲ見ルことにも、人ト見ルといふ意にもなるのである。此等の場合誤解を除く一法として或る語（又は語分子）を挿入して之を區別するやうになつた。上例を以て言へば庭ノ花、日ト月、神ツ寶、花ヲ見ル、風ガ吹ク、雲ニ隱レ等のノ、デ、ト、ツ、ヲ、ガ、ニ等が其である。此諸語（又は語分子）が本初其々の語義を備へた單語であつたことは後記の通であるが、多くは獨立を失うて補助的に他語と連ねて用ひられるから、本篇では之を引くるめて助語と總稱する。――助辭といふ稱呼の方が普及して居るけれども、此文字は宣長等によつてヤスメ辭（コトバ）即ち間投詞の意にも用ひられて居るので、誤解を招く虞がある。又テニヲハといふ稱呼を用ひ、或は西洋語の前置詞に類し、位置前後するの故を以て後置詞と呼ぶものもあるが、テニヲハ又は後置詞に屬せざるものもあるから、總稱とするには不適當のやうに思はれる。

上述の如く助語の使用は絕對的條件ではないから、誤解のない限り之を省いても妨はなく、上例のやうに花見ル、風吹ク、

雲ガクレの如くも用ひられ、口語に於ても行クナラバを行クナラ、肴ヲバ食フといふ意を肴ハ食フといふことがある。同時に助語が多く用ひられて居る歌文から之を除き去つても大畧意は通ずるのである。

梅(ノ)花折リ(モ)折らず(モ)見つれ(ドモ)今宵(ノ)花(ニ)尚しかずけり〔萬八〕

彼(ハ)富(ヲ)失ひ今日(ノ)日(ヲ)漸々(ニ)親(ト)子(トノ)命(ヲ)繫ぐ

括弧内は皆助語であるが、之なしに讀み下しても原意を誤ることはあるまいと思ふ。

さりながら助語(又は其或もの)を固有の意味のない語とし、名詞の格を表示し或は間投詞的に用ひる爲に特設せられたかのやうに說くのは未だ考の精しからざるものといはねばならぬ。國語には無意義の語といふものは存在せず、縱ひ原義を逸したものがあるにしても、其効用は語義に基くものである。例へば助語ノは所有格(屬格)を表示するものと一般に信ぜられて居るが、其實は原義に基き前後二語(句)を連繫するものであるから、主語表示にも句の接續にも用ひられるのである(第三章七參照)。補足格表示に用ひる助語にニとトとの二種があるのも亦後記の如く原義の相違にもとづくものである。されば語義を明にすれば助語の用法は容易に會得せられる筈であるから、本章に於ては逐語語原語義を說くことにしたのであるが、尙未だ之を明し得ざるものがあることを遺憾とする。

各語の性質から觀察すると、助語には原義を離れて專ら前續語と他語と相對關係を表示するものと、固有の語義を添加するものとの二種がある。例へば花ヲ見ルのヲは「花」が動詞「見ル」の目的格たることを表示するものであるが、花ノミを見ルのノミは明に助語ではあるが、之を挿入することによつて或る意味が加はる。其故にヲを略して花ヲ見ルを花見ルというても意に於て大差はないが、之を花ノミ見ルと同意なりとすることは出來ぬ。卽ちヲは獨立をも原義をも失うた助語であるが、ノミは獨立を失うただけで、尙語義を保有して居るのである。「日本言語學」には此二者を分離して記述したけれども、其限界の截然たらざるものがあり、却つて混亂を招く虞があるので、本章では一列に序することにする。但し右の如き性質上の差別のあることを念頭に置かねばならぬ。——感動詞も亦獨立し得ぬ點からいへば助語の部類に屬すべきものであるが、便宜上第三章に於て說明したからこゝには再述せぬ。

助語中にはノ、ヤ、カの如く他民族語と共通又は同源と思はれるものもあるが、多くは日本語獨特で、ソ、ト、ノ、モ、ヲの如くオ韻の語又は音便によりオ韻に轉化させたものが選ばれた所を見ると、第二次生のものであることが明である。オ韻は四段活變化にも用ひられぬもので、他と紛れる虞が少いから、助語とするに適當と考へられたのであらう。いづれにしても助語の發生は國語にとりては實に一大進化で、之によつて一層細密に思想感情を表現し得られるやうになつた。されば動詞の活用と相並んで此語彙の正しい用法を知る事は國語研究の最重要件で、之に通曉しなければ正しく國語を解し、之に口にし筆にすることは不可能である。

助語は通則として體言就中名詞、准名詞に連接し、動詞の連體法を受けるものであるが、特種の助語は未然、已然の兩格にも連用せられること後記の通りである。又可能なる限り他の助語とも相互に連接するから、ニハ、トハ、ヲハ、ソモ、シソモ、ニコソ、モコソ、シモコソの如く用ひられることがあるが、之が爲に新なる意義が發生することは極めて稀で、原義又は原職能が存續することを例とするから、特別の助語として之を說く必要を認めぬ。助語の用法は本章所說の外に前二章に於ても隨所に說明を施したものが少くはないから、各其項下を參照するを要する。

二、各說

逐語解說に先ち通覽に便にする爲に左に主要助語と其用途及意義を表示する

助語	用途又は意義
ノ(ナ)	連繫(修飾限定又は主格表示)、接續
ナベ	「當然」の意
ノス(ナス)	比況
ガ	連繫(修飾限定又は主語表示)、接續
ガリ(許)、ガヘ(ガ上)、ガス(ノスの訛)	
ニ	副位表示(補足、副詞)
ト	副位表示(補足、副詞)、接續
トモ(ドモ)ド	反接
ヲ	目的格表示、接續
デ(ニテの約)	方位格及方便格表示
ハ	卓立表示(絕對)
モ	對立表示(相對、反對)
モノ	反接
ヤ	疑問、反語表示

カ　疑問、反語表示、擇一的語法
カニ(ガニ)　「カのやうに」の意
ゾ　指定
シ　指定、連繫
ジ　「其々」の意
ジク　「其者」の意
コソ　指定
ク　動詞から名詞を作る接尾語
ツ　中間接合語
ツツ　反復連續
ヅツ　「宛」の意
ヘ　方向表示
マデ、マテニ　「迄」の意
ヨリ(ヨ)　「自」「從」「於」「依」等の意
ユ(ユリ)　ヨ(ヨリ)の轉呼
カラ　「自」「從」「因」等の意
ナガラ、ガカラ、ヅカラ、モノカラ　カラの複合助語
スラ　「其自ら」又は「尙」の意
ダニ　「只に」の意
サヘ　「其上」の約か
ガテラ　「旁」の意
ガネ　「豫定」の意
ノミ　「耳」「而已」の意
バカリ　「量」の意
ダケ(丈)、シカ(「其ガ」の意か)
ナド　ナニゾの約

右の外ホド(程)、ホカ(外)、クラヰ(位)、サウ(然)、ヤウ(樣)等も助語的に用ひられるが、獨立し得る語であり、且語義も明白であるから之を除き、以下各語について解說する。

ノ(ナ)。　連繫の用に供せられる助語である。恐らくは原形はナで、ノは助語に用ひる爲に上述の如く殊更に轉呼せられたのであらう。ナはナカ(中)の語幹であるから、二語の仲介を表示するに適はしい語分子であるが、之を連繫助語に用ひるのは我國ばかりではなく、マジャール語(洪牙利)にも其痕跡がありチャモロ語のナは全然邦語のナ(ノ)と用法を同うし、中央カロリン語及マーシャル語等に於てもナ、ネ、ン、イン、アン、エン等の形に於て用ひられるから、或は太古から東方民族間に弘通した原語で、ナカ(中)のナも其から出たものであるかも知れぬ。

ナの形は矢ナ木(柳)、目ナ尻(眦)、手ナ底(掌)、此ナ方、其ナ方、日ナ方(日向)、粉ナ屋、黃ナ粉、高ナ輪、眞ナ鶴の如き熟語に殘り、又前續語(句)の事がらが當然であるといふ意を以てナベ(べは可シの語幹)といふ助語形に於ても用ひられたが、夙く廢れてノ形のみが常用せられるやうにさつた。

ノの本質は單に二語の連繫を表示するに過ぎぬのであるが後續語が名詞(又は名詞形)なるか、動詞又は形容詞なるかによつて、前後兩語の相互關係は次の二つの異つた意味に了解せられる。

(一) 修飾限定。　例、　梅ノ花、波ノまにまに、遙々ノ旅、有ノすさび、大和ヘノ道

(二) 主語對述語。　例、　花ノ咲ク、葉ノ落ツル、波ノ荒キ、此ノ如シ

後の場合動格のb型を以て終止するのは多くは餘韻を殘す爲であるから、葉ノ落ツ、波ノ荒シというてもよし、又ノを略して葉落ツル、波荒キとしても妨はないのである。

ノが句と句との連繫にも用ひられることは既に第三章接續詞の項下に述べた通で、「忘れぬモノノ枯れぬべらなり」〔古今〕、「とはいふモノノ」の如く、モノノの形に於て最も多く用ひられるが、反接の意はモノといふ語にあるので、後のノは單に連繫の用をなすのみである。——モノについては次のモの項下に述べる。

右のノの外に原語を異にすると思はれる一種のノがある。此は上章比況の助動詞の項下に述べたやうに、モノ(物、者)の原語で、モノ又はコトの意に於て次の如く用ひられる。

前の守(カミ)も今ノも——「今の者(守)」の意
上ノと下ノとを取かへ——「上ノ者と下ノ者」との意
我がノなり——「我が物」といふ意
行くノは誰——「行く者」の意
花の散るノを厭ふ——「散ること」の意

此ノは又「紅葉があるノに」「色が美しいノで」の如くも用ひられ、比況の義に轉じてノス(ナス)といふ語を派成したことは既述の通である。

ガ。　ナが nga と發音せられ、其から ga と轉化したものらしく、ノとは全然同義である。例

(一) 修飾限定。　梅が香、君が代、重きガ上

(二) 主語對述語。　見るガ如シ、無きガ悲シキ

口語では花ガ咲ク、風ガ咲クといふやうに、文語に在つては連繫助語を要せざる場合、即ち花咲ク、風吹クというて濟む場合にも此ガが恰も主格表示であるかのやうに用ひられる。

右の外ガが句の連繫に用ひられることは既に第三章接續詞の項下に述べた通である。

ガリといふ熟語も亦此ガとアリ(在)とを連約したものらしく、妹ガりは妹ノ所在といふ意と思はれるが、遊離して一助語となり、「國司のガリ」(土佐日記)の如くノと續けても用ひらた。又萬葉集防人歌に「繩たつ駒のおくるガベ」(四四二九)とあるのはガとウベ(宜)の原語べとを結びつけたもので、上記ナベと同義である。――東歌には「ガ上(ウヘ)」を約してガへとし、若くは反語を表示するカハを訛つてカへとした例もある――同じく東歌に「通は(フ)鳥ガス」(三三六)とあるガスは上記ナスを訛つたものと思はれる(訓詁篇參照)。

ニ。 屢々述べたやうにニはナカ(中)の原語のナから分化したもので、「外(ト)」の義から出た後記トと對立して內外兩面を指示する意味を以て助語に用ひられ、更に分詞語分子及完了助動詞にも轉用せられたものと思はれる。助語としてのニは前續語が文中副位に立つ事を表示するもので、トと用途を同うするが、各自の原義にもとづき指示に多少の相違がある。例

落花雪ニ紛ふ　　落花雪ト紛ふ
人ニ物を與ふ　　人ト物を爭ふ
石を枕ニした　　石を枕トした
都は海ニ近し　　都は海ト隔たる

右の例によつて明なるが如く、トが對外的なるに反し、ニは對內的であるから、石佛ニ話しかけることはあり得ても、石佛ト語るとはいひ難く、人ト共にするとはいふが、人ニ共にするとはいへぬのである。

同じ用法からニが副詞の表示にも用ひられることは既に第三章に詳述した通であるが、左に句(又は節)を承けて副詞句とした二三例をあげる。

淋しさニ宿を立出てながむれば
私ニ考ふるニ甚しき誤なりとす
庭の面(オモ)はまだ乾かぬニ夕立の空さりげなくすめる月かな
今來むといひしばかりニ長月のありあけの月を待ちいづるかな

口語では此ニとへとを混同するものが多いが、へは後記の如く方向を示す助語であるから、海ニ近しを海へ近しといひかへる事は出來ぬ。次の二例を見ても此差別は明白である。

(古今詞)僧正遍昭が許ニ奈良へまかりける時
(同)みちのくへまかりける人ニ

山ニ行クとも、山へ行クともいひ得るが、前者は行く先(目的)を示したもので、後者は山の方へ(進み)行くことである。

ト。 「外(ト)」から分化した語で、前續語が副位に立つことを表示する爲めニと同樣に用ひられ、しかも內外の差別のあることは上述の通で、副詞的表示となることも既に第三章に詳述した(副詞の項下參照)。「生きトシ生けるもの」「秋風の吹キト吹きぬ」の如く用ひられるトも亦之に屬し、「神謀リニ謀り」「いづの道別ニ道わきて」のニと同一用法である。生キ、吹キといふ原形を用ひたのは之を名詞と見なしたので、生クト、吹クトというても意に於て變りはない。

トは對外的指示の意を有す所から語句の接續の用にも供せられる。其用法は既に第三章に述べたが(接續詞の項下參照)、此場合トの特色とする所は完結した一文(句)を次の語(句)につゞける用をなすことである。例

「春來」トいへば「花か」トぞ見る〔古今〕
「我おちにき」ト人に語るな〔古今〕
「早く行け」トいふ
「　」內にをさめたのは本來獨立した一文(句)で、トによつて見ル、語ル、見テ行カム(倒叙)、言フといふ語(句)に連ねられたのである。「有リトは見えて逢はぬ君かな」「人には無シト答へけり」〔古今〕の「有」「無」も一語ではあるが一句と見なすべきものである。

時としてはトの上で句を切り、トを次句の頭につけることがある。例

(古今)日ぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬ、ト思ふは山の蔭にぞありける

右の用法から一轉して「トはいふものゝ」「ト(し)ても」「トもあれ」「ト(に)もかく(に)も」「ト見かう見」「トあらむかからむ」の如き慣用句が生まれ、獨立した接續詞のやうに用ひられる。

此トに後記の「尙」の意なるモを連ねたトモが反接の意を寓し、逆の歸結を導く前提句の接續に用ひられる事は既に第三章に述べた通で(其項下參照)、音便によりドモともいひ、或はいざ立ちよりて見て行かむ「年へぬる身は老いや死ぬる」ト〔古今〕

約濁せられてドともなる。通例トモは假設前提に、ドモ(ド)は既定條件に用ひられるが、本質上には相違があるのではない。左に二三の證歌をあげる。

(古今)今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし散らずばありトモ花と見ましや

(同)音になきてひぢにしかドモ春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

(同)忍ぶれド色に出にけり我が戀はものや思ふと人の問ふまで

句を受けるトに助動詞シを連ねたトシ、トスが强意的表現に用ひられ、更にドス、ダス、デスと轉訛したことは前章に述べた通で(强意的語法の項下)、不知(シラニ)ト、不飽(アカニ)ト、不克(カテニ)トのトが分詞語分子テの音便であることも前章打消のニ(不)の項下に說いた。允恭天皇の御製(紀)に

さゝらがたにしきの紐をときさけてあまたは泥受(ネズ)迹ただ一夜のみ

とあるネズトを不可解として釋紀以下に迹を邇と改めたけれども、ズニとつゞけて用ひることは古語法ではない。此も寢ズテの音便と解すべきである。

右の外比況の意を以て「月トかゞやく」「虎か吼ゆるト諸人の脅ゆるまでに」(萬二)のやうに用ひたのは恐らくはゴト(如)の原語ト(事、物の意)が上述のトの用法と習合した結果であらう。されば此トには對外指示又は接續の意はなく、之をニとかへては全然意味が相違するのである。

ヲ。 斷言は出來ぬが、ヲはヲリ(居)の語幹で、ヰ、ヱ(坐)と同源から分化し、ニ(中)、ト(外)に對して不動の目標を指示する意味を以て助語に用ひられたのであらう。通例動詞の直接目的を表示するが、前目に於て述べたやうに疑義の起らぬ場合には之を用ひる事を必要とせぬ。例へば「風寒み」「世は棄てつ」「酒も飲み煙草も吸ふ」の如きも當然風ヲ、世ヲバ、酒ヲモ、煙草ヲモといふべきを省略したのではなく、必要がないから用ひられなかつたと見るべきである。

さりながらヲの本義は決して之に局限せられぬから、後世ならばニとあるべき場合にも、古歌にはヲを用ひたものがある。例

(記中)大坂に逢ふや少女ヲ道とへば直にはのらず當麻路(タギマヂ)をのる

(古今)花の色は雪にまじりて見えずとも香ヲだに匂へ人の知るべく

第三章接續詞の項下に述べたやうに、ヲが反接の用に供せられるのも或にニに通ずる爲ではあるまいか。左記の例中のヲの如きは之をニと取かへても少しも歌意を傷ふことはないのである。

(古今)夏の夜はまだ宵ながら明ぬるヲ雲のいづくに月やどるらむ

(土佐日記)いつしかみ崎といふ所渡らむと思ふヲ波風やむべくもあらず

口語に於ても此場合には「夜が明けたのニ」「思ふのニ」といふのである。又次の諸例に於ては之をモといひかへても意が通ずる。

(萬九)あざりする海人とヲ見ませ草まくら旅行く人に妻とはのらじ

(古今)萩の花散るらむ小野の露霜に濡れてヲ行かむさ夜は更くとも

(同)人はいざ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとヲいはむ

(同)君があたり見つつヲ居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

後の歌は萬葉集には君之當見乍母將居とあるから、見つつヲというても見つつモでも差支なしとせられたものと見ねばならぬ。若しモに代用せられたとすれば、其はヲの原意にもとづくものではなく、類韻なるによつて相通じて用ひられたのであらう。同じく音便により感動詞のヨとも通用せられることは既に前章に述べた(感動詞の項下參照)。

家ヲ離レ、國ヲ出ツ等のヲも亦後記ヨ(自)の音便で、國カラ離レ、家カラ出ルといふと同義である。又濱ヲ行キ、海ヲ渡ルなどいふヲは大御葬の歌の「濱つ千鳥濱ヨは行かず」とあるヨと用法を同うするから、同じくヨの轉呼と見るべきである。——後記ヨ(ヨリ)の項下參照。

デ。 デはニテ及モテの約で、ニテ、モテも亦左記の如く轉成したものである。

ニテ。　ニシテ、ニアリテ、ニヨリテ等の約。例

空サヘ曇リ勝ニテ(ニシテ)、都ニテ(ニシテ又ニアリテ)、綽名ニテ(ニヨリテ)呼ぶ

モテ。　モチ(用)の轉呼か、又はモチテの約。——沖繩語に於てはカヨテ(通ヒテ)、ノボテ(登リテ)などともいふから、

上古モチの語幹モに直接分詞語分子テを連ねてモテというたことあり得るが、萬葉集にも唯一つの用例があるのみで〔三三三〕、古歌文には常にモチ又はモチテとある所を見ると、尙轉呼若くは約言と見るべきであらう。

右の如くデの原語は動詞の分詞形で、助語ではないが、鎌倉時代から既に此形に於て遊離して用ひられて居るから、便宜上助語の部類にをさめたのである。

此語分子は名詞に直接して方位格及方便格を表示し、「都デ見たもの」「鄙デは稀な美人」「筆デ書く」「弓矢デ射る」といふが如く、口語では常用せられるが、中世文獻にも次のやうな用例がある（大槻氏「口語法」別記から借用する）。

（平語）今世デ物をおもはすだにあるを

（同）鷹の羽デはいだりけるまと矢

（狂言記）皆墨繪デかいてある

デス、デアルのデは全然別系で、助詞トの音便であることは既に前章間接叙法及强意語法の項下に述べた通である。

ハ。 ホ（秀）の轉呼で、葉、穗、初、太等のハ、ホと源を同うし、秀出又は卓立の意を以て各種、各形の體言、助詞及用言に連ね特に之を擧示するに用ひられる。バは其音便で、時としてはワと轉呼せられることもあるが（第一章音便の項下參照）、意味に於ても用法に於ても變りはないのである。

ハの最も普通の用法は直接又は他の助詞を介して名詞（又は准名詞）と連用することで、爲に主格の表示であるかのやうに誤解せられたのであるが、上記の如く格には少しも關係のあるものではないから、主格以外の諸格を表示するニ、ト、ヲ、デとも連用せられ、或は酒ハ飲ム、煙草ハ吸フといふやうにヲなくとも目的格に添付し、稀には「五月雨ハ見えし小篠の原もなし」（後拾）の如く、五月雨ニハといふべきを、ニを略しても尙副位の表示ともなることがある。此場合のハも「我ハ見る」「汝ハ行く」等のハと同じく取わけて之をいふ爲に用ひられたので、場合によつては語意を强める爲にも添へられるのである。

動詞の未然格及已然格にバを連ねると、順の歸結を導く前提句の表示となる事は既に第三章接續詞の項下に述べた通であるが、バを添へることの爲に此關係が生ずるのではなく、動詞の此形自體に其意義が含まれて居るので、バは寧ろ接續の爲に用ひられたのである。されば口語では行クナラバ、見レバを行クナラ、見レアとのみいひ、古歌にも此場合バを

省いたものがある。例

（萬五）遠き境につかはされまかりいませ△うな原の……見渡したまひ

（同一）いにしへも然にあれ△こそ空せみも妻を爭らしき

（古今）里は荒れて人は古りにし宿なれ△や庭もまがきも秋の野らなる

右はいづれも△印の次にバを加へて聞くべきである。ヤハ、カハ等のハも亦語勢の强める爲に添付せられたのである（前章通則參照）。

ハは句切にも用ひられる。「げに面白かりつるハ」「風荒々しく吹きたるハ」の如きは其例で、感動の意を含むものであるが、上代の歌文には多くはヤ又はモと共に用ひてある。例

（記日代宮）さねざしさがむの小野に燃ゆる火のほなかに立ちてとひし君ハモ

（同）あづまハヤ

現代の婦人用語に「さうですハ」「いやだハ（ヨ）」などいふのも之に屬する。ハヤは又動詞の未然格に連ねて見バヤ、行カバヤの如くも用ひられる。此場合には希望の竟を表現するのであるが、其は寧ろ未然格に含蓄せられるので、ハヤは强意と感動とを添へるのみである。

モ。 モロ（諸）、モモ（百）の語幹で、モコ（庶子、同處）、モコロ（與）、ムタ（共）、マタ（亦）、マダ（尙）等と語原を同うし、卓立を意味するハと相並んで對立を表示する。其故に用法は殆ど同一であるが、絕對と相對との相違がある。例へば「私ハいやだ」といへば他人はともかくも自分一個は斷じて欲せざることをいふのであるが、「私モいやだ」といふ場合には「他の人と同じく」といふ意味が含まれるのである。されば多くの場合匹儔對比すべき事物が明示若くは暗示せられる。例

（六帖）をと年モ去年（コゾ）モ今年モをとつ日モ昨日モ今日モ我が戀ふる君

（古今）君が名モ我が名モ立てじ難波なるみつとモいふな逢ひきとモいはじ

（同）君ならで誰にか見せむ梅の花いろをモ香をモ知る人ぞ知る

（同）秋の夜モ名のみなりけり逢ふといへばことぞとモなく明けぬるものを

（同）戀しくば見てモしぬばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

後の二例は恐らくは「明け易い夏の夜」に對して「秋の夜モ」といひ、「戀しき人に逢はずとも」といふ意を言外に含めて「見てモ偲ばむ」というたのであらう。「櫻かざして今日モ暮しつ」の如く必しも昨日又は前日と對比することを意味せぬ場合にも「亦」といふ意が含まれて居るのである。

對立には相對と反對との二つの場合があり得る。助語モも亦上例の如く偶比を表示する外に、杆格する事項を對照するにも用ひられることがある。例へば「ちはやぶる神代モ聞かず」「われてモ末に逢はむとぞおもふ」のモは「亦」の義とするよりもナホ（尙）と譯する方がよく判かる。「千里モ遠しとせず」「今行くモ遲かるまじ」「其でモ差支はない」などいふモも同樣である。「尙」がマダとも訓せられるのも此意味のモが接尾語タを連ねたモタの轉呼で、タを濁つて發音するのは「亦」の意のマタと區別する爲であらねばならぬ。

此意のモは旣記の如くトに連なつて行クトモ、見レドモの如き形に於て反對の歸結を導く前提句を構成し、約濁によつてドとなり、落ツレドの如くも用ひられる。此場合口語に於て行キテモ、見テモのやうに、分詞形にモを添へた形が用ひられるのも（第三章接續詞の項下參照）、モに反接の意があるからである。

モノノ、モノヲ、モノカラ、モノユヱ等はいづれも豫期に反することを表現する准接續詞であるが、ノ、ヲ、カラ、ユヱに其意のないことは明白で、古歌に左記の如くモノとのみ用ひた例もある。

（記下）丹比野に寢むと知りせばたつ薦もちて來ましモノ寢むと知りせば

（萬四）我がもたる三相（ミツアヒ）によれる絲もちてつけてましモノ今ぞくやしき

（同五）天とぶや雁にもがも都までおくりまをして飛びかへるモノ

案ずるに此語は「物」「者」を意味するモノとは同音異義で、上記「尙」の意のモと「物」の原語のノを連ねて反接の意を表示する體言としたのであらう。

ヤ。 疑問助語である。前章感動詞の項下に述べたやうに、從來感動詞のヤと混同せられた嫌があるが、明に疑問表示に用ひたものとしては古歌に次の如き例がある。

（記下）空みつ大和の國に雁卵産（コム）ときくヤ

（萬一）茜さす紫野行きしめ野行き野守は見ずヤ君が袖ふる

（同二）何しかも……よろしき君が朝宮を忘れたまふヤ

（同三）藤なみの花はさかりになりにけり奈良の都をおもほすヤ君

（古今）妻こふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのが住む野の花と知らずヤ

（同）うぐひすの笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるヤと

右によればヤは完結した文（句）にそへて疑問を表示するもので、英語の isn't 佛語 n'est ce pas 獨逸語の nicht wahr 等に類する一個獨立の句と見るべきものである。マーシャル語のイア（如何）といふ語が之と略々同樣に用ひられる所を見ると、恐らくは其源を同うするのであらう（「マーシャル語の研究」參照）。アイヌ語に於てもヤは語句の終に添加してオマン（行）ヤの如く疑問の表現に用ひられるのである。

雲ナリヤ、山ナリヤなどいふ問を雲ヤ、山ヤ等の形を以て表現することの出來ぬのは右の特質にもとづくもので、次に掲げるカのやうに體言と連結して疑問表示とすることは有り得ぬのである。此理を覺らずしてヤが語間に挿入せられた場合例へば「野守ヤ見ぬ」「君ヤ思ほせる」の如き句のヤをも疑問助語なりとするのは誤解である。若し此等の句が疑問を意味するものであるとするならば、其は見ヌ、思ホセルの下に疑問助語カが含まれて居るからで、ヤは感動詞として挿入せられたに過ぎぬ。此事は旣に第三章感動詞の項下にも、第四章活用の通則中にも述べたが、誤解の根ざしが深いやうであるから、惑を解く爲にこゝに再述するのである。

此ヤに更にイカニ（如何）を添へて聞クヤイカニと用ひた例が新古今集に見えるが、其は聞クヤとイカニとが各別個の句をなすものと見るべきである。「春がすみ立てるヤいづこ」（古今）、「かゝる思ひに乾かぬヤなぞ」（後撰）、「昔の人の戀しきヤなぞ」（拾）の如きも、若しヤが疑問を表示するものであるならば、立テリヤ、乾カズヤ、戀シヤといはねばならぬ筈であるから、感動詞のヤと見るべきで、「主ヤ誰」「心ヤ何」「如何（イカニ）ヤいかに」「なぞヤなぞ」のヤも同斷である。いづこヤ、誰ヤ、如何ニヤ、何ヤとつゞけて問を表示することの出來ぬは勿論で、「誰ヤシ人」（武烈紀）、「如何なるヤ人の子」（萬一三）のヤは明に感動詞である。

之を要するに疑問助語としてのヤの用法は極めて簡單で、常に句末に位するものである。――口語では希用であるが、

尙方言に殘つて居る――此ヤ及之にモ又はハを添へたヤモ、ヤハが時として反語の表示となることは前章の通則中に述べた通で、已然形に連用せられた場合にも亦反語となることが多い。例

（神功紀）玉きはるうちのあそが腹の血はいさごあれヤいざ逢はな我は

（萬一）大伴のみつの濱なる忘貝家なる妹をわすれて思モヘヤ

（同一四）逢へらくは玉の緒しけヤ戀ふらくは富士の高峰に降る雪なすも

（同一）大名兒ををち方野邊に刈る草の束の間も吾忘れめヤ

（古今）笹の葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色にいでめヤ

此は既記の如く已然格に反接の意が含まれて居るからである（前章終止法の項下參照）。

カ。　感動詞のカの外に、別に疑問を表示するカといふ助語がある。――朝鮮語に於ても同じ意味に用ひられる――恐らくは漢語何、假と源を同うし、國語に於ては既記の不定代名詞カ（彼）と此疑問助語とに分化したのであらう。

此助語が上記ヤと異る點は體言又は動詞の連體法に連なることにある。換言すればヤの如く完結した文（句）を受けることはなく、カによつて文（句）が終結せられるのである。例

（萬四）うま酒をみわの祝がいはふ杉手ぶりし罪カ君に逢ひがたき

（同一）しほさゐにいらごの島邊こぐ舟に妹のるらむカ荒き島回を

（同一〇）秋萩は雁に逢はじといへればカ聲を聞きては花に散りぬる

（同三）玉かつま逢はむといふは誰なるカ逢へる時さへ面がくりする

（古今）世の中は昔よりやはうかりけむ我が身ひとつの爲になれるカ

右の外ヤに在つては許されぬ雲カ、山カ、吳カ、越カの如き用法も可能であり、疑問代名詞に直接又は間接に連つて誰カ、イヅレカ、何事ヲカ、幾夜カの如くも用ひられる。即ち同じく疑問を表示する助語ではあるが、ヤとは性質及用法全く相違するのである。

カは上例の如く句を終結することを例とするが、疑問代名詞と連用せられる場合には、次の語句につゞけて「誰カの子」「いづれカを取る」「何事か諜し合はせ」「幾夜カ寢つる」などいふこともある。此場合のカは誰、何、孰の如き語の含有する一般的の疑（不定）の中に擇一的（アルタ・ネーチーヴ）の意味を與へるのみで、必しも問を表示するものではないから、前續語と合はせて複合名詞形と見なされたのである。最後の例の「幾夜カ寢つる」の如きも正しくは「幾夜カ寢つるカ」といふべきを下のカを略したに過ぎぬ（前章疑問法の項下參照）。此擇一的語法は疑問代名詞の先行せざる場合にも「米カ麥カ粟カを常食とする」「麥酒カ茶カが欲しい」といふ形式に於て口語にも用ひられ、或は下のカを略して「米カ麥カ粟を常食とする」「麥酒カ茶が欲しい」といふこともある。

トを以て承けた句を一個の名詞形と見て之にカを連ねて疑問を表示することは勿論違法ではなく、萬葉集にも君が御船をいつトカ待たむ」（二五卷）の如く用ひた例もあるが、之を上記擇一的語法に准じて「何トカ彼トカいふ」「見るとカ聞くトカする」「何トカいふ村」のやうにつゞけるのは稍々後代の語法で、古今集以下には次の例の如く此用法が見えるが、範とすべきではない。

（古今）花ごとにあかず散らしし風なればいくそばく我はうしトカは思ふ

（後撰）物おもふと過ぐる月日も知らぬ間に今年も今日にはてぬトカ聞く

（拾遺）何トカやくきの姿はおもほえてあやしく花の名こそ忘るれ

此等の異例により、且「手ふりし罪カ君に逢ひがたき」「現にカ妹が來ませる」の如く倒叙することがある爲に、感動を表示するカと混同せられ、語間に挿入せられたカも亦疑問助語と誤解せられたのであるが、――第三章感動詞及第四章通則疑問法の項下參照――疑問のカは原則として句切に用ひらるべきものである。

此カに感動詞モ又は强意的のハを連ねたカモ、カハも亦疑問表示に用ひられる。

（萬三）妹も我も一つなれカモ三河なる二見の道よ別れかねつる

（古今）いかならむ巖の中に住まばカハ世のうきことの聞こえ來ざらむ

但し「有るカモ知れず」などいふモは「亦」の意の助語で、上述の擇一的語法に屬するものである。

カ（カモ、カハ）を添付した疑問形式が疑のないことをいふに用ひられた場合には、反語の表示と見なされることは既に前章通則中に述べた通である。カハが最も多く用ひられるのは語勢を強めるからであらう。

萬葉集中に屢々用ひられたカニ、ガニは此カに助語ニを添へたもので、「カのやうに」といふ意味である。――「詞玉緒」に之を後記のガネと同義としたのは誤であるといはねばならぬ。――例

（萬四）わが宿の夕かげ草の白露の消ぬカニもとな念ほゆるかも

（同八）五月を近みあえぬガニ花さきにけり

ゾ。 代名詞ソ（其）と同語で、助語としては其と指定する意を表示し、上記カと同様に句末につくことを原則とする。例

（記上）あぢしき高彦根の神ソヤ

（同中）「まつりこし御酒ソ」あさすをせササ

（古今）いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物おもふころゾ

（萬一七）春花のうつろふまでに逢ひ見ねば月日よみつつ妹まつらむゾ

（後撰）淺してふことをゆゆしみ山の井は堀りしにごりに影は見えぬゾ

後の二例に在つてはソを主格に讓つて「待つらんハ妹ゾ」「見えぬハ影ゾ」というても意に於ては大差はなく、更にハを略して之を倒置し、「妹ゾ待つらむ」「影ゾ見えぬ」ともいひ得る。此倒叙法は上古から行はれたと見えて記紀萬葉にも例が多い。左に其二三を擧げる。

（記中）畝火山ひるは雲とゐ夕されは風吹かむとゾ木の葉さやげる

（應神紀）い切らずゾ來る梓弓ま弓

（萬一）時なくゾ雪は降りける間なくゾ雨は降りける

此用例から逆推してゾといふ助語を用ひた場合には必ず連體法（動格ト型）で終止せねばならぬとする說の妄なることは既に前章呼應の項下に述べた通である。口語では此用法は全く廢れ、昔にかへつて句切にのみ用ひられる。例

また來るゾ　其はおかしいゾ

「是ゾ」といふ取柄もない

右の中用言を承けるゾはゼと訛り、「其はおかしいゼ」「また來るゼ」ともいひ、又上例「高彦根の神ゾヤ」のゾヤはゾヨ又は

ゾイの形に於て今も方言に用ひられて居る。アルマイシなどいふのもアルマイゾの訛であらう。

ゾはカと同じく直接又は間接に疑問代名詞に連用せられ、疑又は問を表示することがある。例

（萬五）いかなるや人の子故ゾ」通はすも吾子

（同一四）柳こそ切ればはえすれ世の人の戀に死なむをいかにせよとゾ

（新古今）筏師よ待て言とはむ水上はいかばかり吹く峰のあらしゾ

（萬四）はねかづら今する妹をうら若みいづれの妹ゾ」ここだこひたる

（後撰）春雨にいかにゾ」梅や匂ふらむ我がまつ枝は色もかはらず

右の場合ゾに代ふるにカを以てしても大意は變りはないが、ゾといへば疑問の中にも何物をか指定しようとする意味が籠つて居るのである。此形は又擇一的語法として次の語句に連ね、「誰ゾ來てくれ」「何ゾ欲しい」といふやうにも用ひられる。口語のドウゾも「孰ゾ」の轉呼で、「いかやうにも」といふ意である。又「いづくんゾ知らん」の如く反語の表示にも用ひられることがある。

「ないひソ」「雨な降りソネ」「雲なたなびきソ」の如く禁止的語法に用ひられるソも亦此助語である。其故にソを省いて「な言ひ」「雲なたな引き」というても禁止の意を失ふことはなく、ソが通例連體法（動格ト型）を承けるものであるに拘はらず、此場合に限り原形に連るのである。

シ。 シも亦「其」の意から出た助語で、古は上記のゾと同じく指定の爲にも用ひられたやうである。例

（記上）はたた肝此（コ）シよろし

（萬三）春の日は山シ見がほし秋の夜は川シ清（サヤ）けし

（同四）おもふにシ吾が身はやせぬ嘆くにシ袖さへぬれぬ

（同七）すみの江に行くとふ道に昨日見し戀わすれ貝ことにシありけり

但し句切に用ひることのないのはゾと異る點で、從て連體法を以て終止することもないのである。――萬葉集に「夢にシ見ユル」（五九一）といふ用例があるが、其はカモといふ感動詞を添へるのを略して餘情を殘したものである。

さりながらシの原義にもとづき「其」又は「其自ら」といふ意に用ひられた場合も亦少くはない。例

（記中）大君シよしと聞こさば獨居りとも

（萬一）秋の野のみ草かり葺きやどれりし宇治の宮處（ミヤコ）のかり

ほシ思ほゆ

（同）天の下に國はシモ多（サハ）にあれども

（同四）夜のほどろ吾が出て來れば吾妹子が思へりしくシおもかげに見ゆ

（同）出でていなむ時シハあらむことさらに妻こひしつつ立ちていぬべしや

（同八）橘の花ちる里のほととぎす片こひしつつ鳴く日シゾ多き

ゾも亦原義は「其」であるから、最後の例の如きは重複するやうに見えるが、此場合ゾは全く助語化して指定の意を表示するのみであるから少しも妨はない。――後記のコソのソの如きも同例である――シモはモが「亦」の意か「尙」なるかによつて用途を異にし、後の場合には「折シモあれ」「時シモあれ」の如く反語的氣分があらはれるのである。

右の外、形容語尾のシと同じく、ソノ（其）といふ意を以て助語ノに准じて語句の連繫に用ひ、主語對述語の關係を表示することもある。例

（萬四）吾背子シ遂げむといはば人言は繁くありとも出でて逢はましを

（同七）黑牛の海くれなゐ匂ふ百しきの大宮人シあざりすらしも

「雁シともしも」「見らくシよしも」「心シいたし」「妹が袂シ思ほゆるかも」の如きも同一用法に屬する。萬葉集に用ひた「之」の字がシともノ（又はガ）と訓み得られる場合があるのは之に因るものである。口語に於ても「見もしたシ聞きもしたシ」「風は寒いシ雨は降るシ」の如く、シといふ助語を「餅だノ酒だノ」のノと同樣に句の接續に用ひるのである（第三章接續詞の項下參照）。

口語にも用ひられるイツ（何時）シカといふ熟語はイツゾに感動詞カを連ねたイツゾカの轉呼で、「何時カ」といふに同じく、之にモを添加したイツシカモはイツゾモと略〻同義で、「何時の間にやら」といふ意味にも用ひられる。例

（後撰）松もひき若菜も摘まずなりぬるをイツシカ櫻はやも咲かなん

（六帖）イツシカモ今日は暮しつあすか川わたりて早く玉藻かづかん

第一の歌はイツカ咲く櫻といひかけたので、次の歌は「いつの間にやら今日はくらした」といふ意である。又かくシコソ、うべシコソの如くコソとつゞけ、或はシモゾ、シモコソと重ねて用ひることもある。此等の例を見てシは何等の意味もないやすめ辭（間投詞）なりと說くのは大なる誤で、國語には無意味の語は存在せぬ。此等のシも亦「其」の義に還元して解すればよく意が通ずるのである。

ジ。　右のシを重ねたシシの約濁で、原義は「其々」である。萬葉には男ジ物、馬ジ物、犬ジ物、鳥ジ物、露ジ物、雪ジ物の如く用ひた例が多く、男（馬、犬、鳥、露、雪）其物を意味する。――用例は語誌にあげたから之を省畧する。ツユジモノは露霜乃ともかくが、露及霜といふ意ではない。

此ジに後記のク（者）を連ねたジクが「其者」の意となることは勿論である。例

（記中）登岐士玖能迦玖能木實者是今橘者也

（萬一九）立ち別れ君がいまさば磯城島の人は吾ジクいはひて待たむ

（續紀詔）又此家自久藤原ノ卿等ヲ……家ナリトキジクのカグのミは紀に非時香果と記され、萬葉集にも非時又は不時とかいてトキジクと訓ませてあるので、ジクに非（又は不）の意味があるかのやうに說くものがあるが、語義は「時其時」卽ち「隨時」で、「時ともいはず」といふ意にはなるが「時ならず」又は「季節はづれ」といふことではない。家ジクが「家其もの」の意なることは勿論で、我ジクも「我自身」の意から「我が如く」といふ義に轉用せられたものと思はれる。

コソ。　「是ゾ」の意で、強く指定するに用ひられる。此語はゾと異り、文中一定の位置はなく、隨所必要に應じて挿入せられるが、句末に位するものは多くは次に來るべき短い結句が畧せられて居るのである。例

（古今）津の國のなには思はず山城のとはに相見むことをのみコソ

（拾遺）あしたづの澤邊に年はへぬれども心は雲の上にのみコソ

前者には「思へ」、後者は「あれ」を句末に補うて聞くべきである。此省畧形式は口語にも殘り、「あなたコソ」「手前コソ」「ようコソ」の如く用ひられる。又「押しても引いても動かばコソ」の如きは一種の反語ではあるが、コソに其意がある譯ではなく、動カバといふ假定と句末に含まれるアラメといふ

言葉に因するのである。

コソを用ひて強く指定する場合には其述語は當然決定的なることを要するから、上古は已然格を以て終止し、此格が常用せられぬやうになつた後に於ても慣習的にコソと呼應して之を用ひたことは事實であるが（前章終止法の項下參照）、絶對的法則と見ることの誤りなるは既に前章呼應の項下に述べた通りである。

コソはソと同じく動詞に連用せられる場合には連體法（動格b型）を承けることを例とするのであるが、古歌には行ケコソ、見レコソ、落ツレコソの如く已然格に直接したものが少くはない。これは行ケバコソ、見レバコソ、落ツレバコソと同義であるが、決してバを畧した譯ではなく、古はバ、ドモ等と同じくコソも亦此格に直接連結することが可能とせられたのである。例

（仁德紀）さわさわに汝がいへせコソ打わたす長はえなす來入りまゐくれ

（萬一）古もしかにあれコソ空せみも妻を爭ふらしき

上記の外別に動詞の原形に連つて希望の意を表現するコソといふ語がある。例

（萬三）現（ウツツ）には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にをつぎて見えコソ

（同）うぐひすの待ちがてにせし梅の花ちらずありコソ思ふ子がため

（同六）天にます月よみをとこ幣（マヒ）はせむ今宵の長さ五百夜つぎコソ

此コソが希望の意のカ（感動詞）に上揭指定のソを添へたものであることは勿論であるが、「うちやめコセネ」（記上）、「散りコスなゆめ」（萬八）、「ありコセぬかも」（萬三）と用ひた例のある所を見ると、古は之を活用したものと思はれる。

ク。　コ（此）と同語であるが、「事」「者」の意を以て動詞の諸時格に接着して名詞形を作るに用ひられる。――朝鮮語に於ても「其」の意のユ（音キュ）から分化した刂といふ語尾は動詞を抽象名詞化するに用ひられる――其故に嚴密にいへば接詞尾であるが（第二章名詞語尾の項下參照）、便宜上こゝに記述する。

此語は現在及未來時格に在つては未來分詞形（一段二段活に在つてはアリの未來分詞形の畧ラを介する）、過去時格に於ては連體形シに連る。例

原形	現在	未來	過去
曰ヒ	曰ハク	曰ハマク	曰ヒシク
思ヒ	思ハク	思ハマク	思ヒシク
思ヘリ	思ヘラク		思ヘリシク
降リ	降ラク	降ラマク	降リシク
見	見ラク	見マク	見シク
寢	寢ラク（ヌ）	寢マク	寢シク
戀ヒ	戀フラク	戀ハマク	戀ヒシク

他の諸時格も之に准じて宣リ給ヒツラク、語リケラクの如く用ひられた。此諸形が眞淵、宣長、春庭等の解釋のやうに、イフ、イハム、イヒキ等を伸べたもの（卽ち動詞の終止法の變形）にあらざることは勿論で、――國語に伸言といふものゝあり得ざることは第一章に述べた通りである――「曰」の例を以ていへば、曰ハクは曰フコト、曰ハマクは曰ハムコト、曰ヒシクは曰ヒシコトの意の名詞形である。其故に曰クとあれば必ず「トイフ」と結んだので（畧して單にトを以て終止することもある）、同じやうに曰ハマクの結びはトイハム、曰ヒシクの其はトイヒキであらねばならぬ。然るに先學之に留意せず、古事記傳の訓の如きもノリタマヒツラクに對してノリタマヒキを用ひる等時格の呼應を誤まつたものが多いが、必ず相應の時格を用ひねばならぬことは次の例によつても明である。

（萬五）神代より言ひつてケラク　空みつ大和の國は　すめ神のいつしき國　言たまの幸はふ國と　語りつき言ひつがひケリ

（續紀詔）朕宣自久大臣ノ御世重テ明淨心以テ仕奉事ニ依テナモ天日嗣ハ平安ク聞召來ル此辭忘給ナ弃給ナト宣比之

動詞にクを添付した名詞形は古典には屢々用ひられて居る。例

（記中）道のしりこはだ少女はあらそはず寢シクをしぞもうるはしみ思（モ）ふ

（萬四）夜のほどろ吾が出て來れば吾妹子が思へりシクし面かげに見ゆ

（同一四）さ寢（ヌ）ラクは玉の緒ばかり戀フラクは富士の高峯の鳴澤のごと

第一の歌の寢シクは「寢し者」といふ意、思へりシクシの後のシは前號の助語で、こゝではゾと同義である。

此語法は中世以降全く廢れて擬古歌文（往々用法を誤つて居るが）と曰ハク、思ハク、恐ラクハの如き熟語とに名殘を留めて居るのみである。

ツ。 ツラ(連)の原語で、連結の意を以て二語の結合を表示するに用ひられる。ノ(ナ)、ガとの相違は二語の相互關係を示すことはなく、單に兩者が相倚つて一表現を形成する場合にのみ用ひられることにある。例へば八百萬ノ神は多數といふ意を以て「八百」を「神」の修飾に用ひたのであるが、五百ツ眞賢木は五百(又は多數)の枝葉を有する一本の榊を意味する。又天ノ若日子は海人族の(人なる)若彦といふものを指示するのであるが、天ツ彦、空ツ彦は天子、太子の稱呼に代用せられたのである。其故に國ツ神といへば下界に住む神を意味し、國を掌る神でも、國家が祭祀する神をいふのでもなく、時ツ風は季候風で、其時々の風といふ意にはならぬ。口語では上ツ方、外ツ國の如き熟語になつたものゝ外用ひられぬので、此用法を誤り、沖ノ白帆を沖ツ白帆などいふものがあるが、心すべきことである。

右の如く此語分子によつて連結せられた二語は複合名詞と見なさるべきもので、尋常ならば「遠山」「先頃」のやうに二語を直接連用すべき場合にも、口調上若くは誤解防止の爲、遠ツ祖、先ツ日の如くツを挿入するのである。其故に正しくいへばツは中間接合語であるが、便宜上こゝに收めた。

ツツ。 右のツを重疊したもので、動詞に連ねて反復連續を表することは既に前章時格の項下に述べた通であるが(進行格參照)、其本質は助語で、動詞の原形(名詞形)に連ねて副詞的に用ひられる。例

(記上)ここに御佩かせる十拳の劍を抜かして後手にふきツツ遁げ來たまひ

(同中)歌ひツツ釀みけれかも舞ひツツかみけれかも

(萬五)さわぐ子どもをうつてては死には不知見ツツあれば心はもえぬ

(同三)君があたり見ツツも居らむ生駒山くもな棚びき雨は降るとも

(古今)わだつみの濱の眞砂をかぞへツツ君が千年のある數にせむ

フキ(振)、歌ヒ、舞ヒ、見、數ヘ等はテを添へても副詞形になるので(第三章副詞の項下參照)、此ツツも亦テから出たものであるとする說もあるが、上記の如く全然語原を異にするのみならず、テには少しも反復の意は含まれて居らぬのである。

近時は見テキルといふ意味を以て見ツツありと用ひるものがあるが、見テキルは文語に直せば見アリで、ツツの意は含まれて居らぬから誤用とせねばならぬ。さりながら其故を以てツツとアリとを連用すべかずとする說も亦誤で、上記の如く古歌にも見ツツアリと用ひた例があり、口語に直せば「見イ見イして居る」といふ意になるのである。

ヅツ。 一つヅツ、少しヅツ、いくらヅツの如く用ひるヅツは右のツツとは全然別語で、「數」の意のツ(第三章數詞の項下參照)を重疊したものである。本初は恐らくは數詞に限り、ヒトツヒトツといふべきを約して一つヅツとしたのであらうが、遊離して一助語となり、あらゆる數稱に直接、又はダケ、ホド、バカリを介して連用せられるやうになつた。ヅツと濁る上記のツツと區別する爲と思はれる。例

三つ程ヅツ　少しばかりヅツ　これだけヅツ

へ。 「方」を意味する單語であるが、獨立しては用ひられず、ユクヘ(行方)、イニシヘ(古)の如き熟語に殘り、ヤマベ(山邊)、ウミベ(海邊)、ウネビ(畝傍)、ハマビ(濱傍)の如くべともビとも轉呼せられた。助語としては「方に」といふ意に用ひられる。例

(記下)ひけたの若くるす原若くへにゐ寢てましもの老いにけるかも

(萬二)吾が背子を大和へやるとさ夜更けてあかとき露に吾が立ちぬれし

(同10)わが宿になきし雁がね雲の上に今宵なくなり國へかも行く

(古今)僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時

口語では此助語を一層廣い意味に用ひ、往々既述のニと同一視せられることもあるが、尙「誰ニやらう」「親ニ相談して」といふべきを「誰へやらう」「親へ相談して」の如く用ひるのは訛言とせねばならぬ。

マデ(マテニ)。 原形はマテニで、マデは其約濁と見え、古歌にはマデと同意を以てマテニと用ひた場合が多い。例

(萬一)しら波の濱松が枝の手向草いく世マテニか年の經ぬらむ

(萬三)天雲のそぐへの極み天地の至れるマテニ

(萬九)古にありけることと今マテニ絕えずいひ來る

此等のマテニをマデに更に助語ニを添へた「迄に」の意と解することは出來ぬ。されば之をマデニと濁音化することは不當で、萬葉集にも多くは二手、左右手、諸手の如くマテと清んで訓むべき假字が用ひられて居る。マテニは恐らくはマタ(俣)

ニの轉呼で、道路、河流、枝條等何にもあれ、分岐したものは其交叉點卽ちマタを以て止りとするから、迄(至、竟)の義を生じたのであらう。マデ(萬代、麻低等)と用ひた例も亦既に萬葉集中に見える。

右の原意からマテニ(マデ)は更に程度を表示するにも用ひられる。例

(萬二)ととのふる鼓の音は雷の聲と聞くマデ、吹きなせるくだの音も讎見たる虎か吼ゆると諸人のおびゆるマテニ

(古今)朝ぼらけ有明の月と見るマテニよし野の里に降れる白雪

(拾遺)しのぶれど色に出でにけり我が戀はものや思ふと人の問ふマデ

口語には尙次の如き用法がある。

そんなにむつかしい所なら行くまいマデよ(狂言記)

出來ないマデもやつて見る

風が强いのに雨マデ降つて來た

此等のマデは轉義であらうが、尙マタ(俣)の原語モの意が潛んで居るやうな心地もする。右の三例の如きも文語に直す爲にはマデをモに代へて「行くまいマデよ」は「行かずモあらむ」「出來ないマデも」は「出來ずトモ」、「雨マデ」は「雨モ」とすれば意がよく通ずる。

ヨ(ヨリ)。　ヨは「世」「代」「夜」「節間」等の意に用ひられる語であるが、抽象的には空間又は時の間隔を意味したものと思はれる。助語のヨも之から分化したので、活用語尾リを接着したヨリと併用せられ、音便によつてユ(ユリ)とも稱へた。ユ(ユリ)の用法は後段に項を分けて記述することとし、こゝには專らヨ(ヨリ)の形について述べる。

助語としてのヨ(ヨリ)が表示する意義は次の如く區別して考察することを便とする。——以下引證する古歌のヨ(ヨリ)は盡く字音假字を以て明示せられたもののみである。

(一)原義により空間に於ける移動推徙を表示する例。

(記中)濱つ千鳥濱ヨは行かず磯傳ふ

(萬一八)ほととぎす此ヨ鳴きわたれと燈火を月夜になぞへ其かげも見む

(同三〇)堀江ヨリ朝潮みちによる木つみ貝にありせばつとにせましを

(源語)沖ヨリ舟どものうたひ罵りて漕ぎ行く

(竹取)あたりヨリだにな歩行きそ

此ヨは音便によりヲとも轉呼せられ、近代語では「濱ヲ行き」「此處ヲ鳴き渡る」といふ。——ヲの項下參照。

(二)右のヨ(ヨリ)から一轉して其來自、卽ち「自」「從」の意を表示する例。——此用法には空間と時間とが含まれる。

(記中)はしけやし我家の方ヨ雲井たちくも

(萬一八)清き其名を古ヨ今のをつつに

(記下)おき女もや淡海のおきめ明日ヨリはみ山がくりて見えずかもあらむ

(古今)しのぶれど戀しき時はあしびきの山ヨリ月の出でてこそ來れ

「心ヨリ思ふ」などいふヨリも之に屬する。口語に於ても「東京ヨリ大阪へ」「昔ヨリ今まで」の如く常用せられる。

(三)轉義により比較に用ひられる例

(萬五)雲に飛ぶくすりはむヨは都見ばいやしきあが身また若ぬべし

(同)我ヨリも貧しき人の父母は飢え寒からむ

(古今)花ヨリも人こそあだになりにけれいづれを先にこひむとか見し

此ヨリもまた今も常用せられる。但し歐洲語の比較級を譯する爲に「ヨリ高い」「ヨリ多い」などいふのは正しい日本語ではない。

(四)ニヨリテの意卽ち方便格に用ひられる例

(記中)空は行かず足ヨ行くな

(詞花)播磨守に侍りける時、三月ばかり舟ヨリ上り侍りけるに

萬葉集十三卷の「人つまは馬從ゆくに己夫の步從行けば」とある馬從、步從も馬ヨリ、步ヨリと訓むのであらう。口語では足デ、舟デ、馬デ、步デといふが、此デも亦ニヨリテの約なることは上記デの項下に述べた通である。

ユ(ユリ)。　ユ(ユリ)がヨ(ヨリ)の音便であることは上記の通であるが、萬葉集には多くは「自」「從」の字が用ひられて居るので、之をユ(ユリ)と訓むべきか、ヨ(ヨリ)と稱へるか判明せぬ。古事記にはユ(ユリ)の假字を用ひた例はないが、書紀には常にユとあり、萬葉集の字音假字にはヨよりもユの方が多い所を見ると、奈良朝には通例ユと發音せられたものと思はれる。但し語義には少しも變りはなく、中世以降には全く用ひられぬやうになつたから、左に字音假字を以て明示せられた二、三例をあげるに止める。

(一) 空間の意に用ひられた例

(繼體紀) ひら方ユ笛吹きのぼる近江のやけなの若子(ワクゴ)い笛吹き上る

(萬七) まきむくのあなしの川ユ往く水の絶ゆることなく又かへり見む

(二) 來自の意を表示する例

(景行紀) はしきよし我家の方ユ雲ゐ立ち來も

(萬六) さひが野ユそがひに見ゆる沖つ島清きなぎさに

(同三〇) かしこきや命(ミコト)かがふり明日ユリやかえ(ヤ)がむた寢むいむなし(モ)にして

(三) 比較に用ひた例は見あたらぬ。

(四) 方便格を表示する例

(萬一四) を筑波のしげき木の間よ立つ鳥の目ユか汝を見むさ寢(ネ)ざらなくに

萬葉集第五卷に「心ユも思はぬ間に」とあるユは次項に述べるカラと同義に用ひられたので、心ユ卽ち心カラは心自ラの意である。されば次の如くも詠まれて居る——但し自又は從はユと訓むか、ヨであるか判明せぬ。

(萬七) 吾宿に生ふる土はり從心も思はぬ人の衣にすらゆな

(同二) 眞くずはな小野のあさ茅を自心も人ひかめやも吾なけなくに

(同一〇) まけながく戀ふる心自あき風に妹が音聞こゆ紐ときまけな

カラ。 原義は「莖」で、其形狀から柄、幹、空、殼等の意となり、助語としても亦、ヨが節間を意味すると同樣に、莖幹の意から間隔の義を生じ、轉じて「自」「從」「因」等の意に用ひられるやうになつた。されば神代紀にも一夜之間といふ字に一夜ノカラと訓してあるのである。此はヨ(ヨリ)の第一用法に相當するもので、次の如き例がある。

(萬九) 語りつぐカラにもこゝだ戀しきをただ目に見けむいにしへ男

(古今) すみの江の松のあき風ふくカラに聲うちそふる沖つしらな波

(同) 秋をおきて時こそありけれ菊の花うつらふカラに色のまされば

右のカラはアヒダニ又はマニ(間に)といふ言葉にかへて見ればよく意が通ずる。

此意味から來自の義に轉じたのは極めて當然で、同じく神代紀に自頓丘をヒタヲカラと訓してある外に、次の如き例もある。

(萬二) 月夜よみ妹に逢はむと直路(タダチ)カラ吾は來たれど夜ぞ更ける

此用法は口語には最も普通で、「天カラ降る」「昔カラ今まで」の如く用ひられる。さりながら直接比較の用に供せられることはなく、其意に用ひる爲には「東京カラ見レバ京都は閑靜である」「今カラ思ヘバ昔は氣樂だつた」といふやうに、見レバ、思ヘバ等をそへて表示する。又語義からいへばニヨリテの意にはならぬけれども、ヨリに准じて「陸カラ行く」「舟カラ歸る」の如くも用ひられることがある。

來自の意から一轉して因由を表示するにも此助語を用ひ、音便によつてカレと轉呼として「故」の字があてられる。——ヨも亦ヨシ(由)といふ形に於て此義を表現するが、助語として之を用ひることはない。——例

(萬一八) 明日よりはつぎて聞えむ時鳥ひと夜のカラにこひ渡るかも

(古今) 惜しむカラ戀ひしきものを白雲の立ちなむ後は何ここちせむ

口語に於ても「少しでよいカラ呉れ」「惜しいカラいやだ」といふやうに此意味に常用せられて居る。

古語に神カラ、國カラ、山カラの如く用ひたカラも亦因由の義から出たもので、オノヅカラ、ミヅカラ(自)のカラと同義である。例

(萬三) みよし野のよし野の山は山カラし貴かるらし水カラしさやけかるらし

(同一) 玉藻よし讃岐の國は國カラか見れども飽かぬ神カラかここだ貴き

されば神カラ、國カラ等は「神によつて」「國によつて」の意とも解くことが出來るのである。心カラ、我カラ等のカラも之に屬し、口語では人ガラ、家ガラ、品ガラの如く連濁することを例とし、獨立して「ガラがよい」「ガラが悪い」のやうにも用ひられる。次の例の如きも此カラの轉用である。

(萬五) はしきやしかくのみカラに慕ひ來し妹が心のすべもすべなさ

(古今) むらさきの一もと故にむさし野の草は皆カラあはれとぞ見る

カラは上記の如く他語に直接するのであるが、時としてはナ

（ノ）、ガ、ツの如き連繫助語を介することもある。之が爲に意義に變化を來さぬことは勿論で、「神カラと言擧せぬ國」（萬三）と同意を以て「神ナガラ言擧せぬ國」と用ひた例もあり。（同卷）、萬葉集二卷高市皇子の挽歌に「皇子ナガラ任けたまへば」とあるのは皇子なるカラに任命せられたといふことである。然るにカラには上述の如く「間」といふ意があるので、サリナガラ、然シナガラの如く「然る間に」といふ意に轉じ、次の如くも用ひられるやうになつた。

春ナガラ風寒し　　讀みナガラ考ふ
歩みナガラ見る　　思ひナガラ過す

之に乍（ツツとも訓む）の字を充てるが、ナガラにはツツの如き反復連續の意はない。又「五人ナガラ引き連れ」などいふのは上例の「むさし野の草は皆カラ」と同一用法である。

オノヅカラ、ミヅカラ、テヅカラ、ロヅカラ等が己カラ、身カラ手カラ、口カラと同義なることはいふまでもない。ガカラとつゞけた例は次の古歌に之を見るのみである。

（萬六）古さとは遠くもあらず一重山こゆるガカラに思ひぞ吾がせし

（同七）手にとるガカラに忘ると海人のいひし戀わすれ貝こ

とにしありけり

右の外モノカラとつゞけて原因の結果に伴はぬことを表示する用法もあるが、其は上記の如くモノに反接の意があるからで、カラは單に「因」を示すに過ぎぬ。例

（古今）古里にあらぬモノカラ我が爲に人の心の荒れて見ゆらむ

（同）わだつみの沖つ汐あひに浮ぶ沫のきえぬモノカラ寄る方もなし

スラ。　既記のシに接尾語ラを添へたシラの轉呼であるから、――此ラは複數記號ではない――古歌には單に「其」又は「其もの」といふ意を以てスラを用ひた場合もある。例

（萬五）寒き夜スラを我よりも貧しき人の

（同三）いきの緒に吾がいきつきし妹スラを人妻なりと聞くはかなしも

（佛石足歌）よき人のまさ目に見けむみあとスラ我は得みずて岩にゑりつく玉にゑりつく

之にモを連ねたスラモは「其尙」の意となるのであるが、モを略しても此義に用ひられることがある。例

（萬六）かくしつつ遊びのみこそ草木スラ春はおひつつ秋は散りゆく

（同）言とはぬ木スラいもとせありとふを唯ひとり子にあるが苦しさ

（曾丹集）とけてスラぬる程もなき五月雨をねさめ勝にてあかす頃かな

口語では原義のスラは全く廢れ、第二義のも希に用ひられるのみで、多くはデモ又はサヘ（サヘモの略）が之に代用せられる。例へば草木スラといふ意は草木デモ、草木サヘ（モ）、草木デサヘ（モ）といひかへられるのである。

ダニ。　タはタダ（只人）の原語であるから、タニは只ニといふに同じく、「只此のみ」の意に用ひられる。例

（萬三）夢にダニ見ざりしものをおほほしく宮出もするかさひの隈回を

（古今）今よりは植ゑてダニ見じ花すすき穗にいづる秋はわびしかりけり

（同）うつせみはからを見つつぞ慰めつ深草の山けぶりダニ立て

（同）皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかはきダニせよ

土佐日記に「鷗サヘダニ浪と見ゆらん」とある歌を六帖にサヘタダと直して收錄したのは「鷗サヘタダニ波と見える」といふ意なるが故である。此頃まで尙ダニの意義は正當に了解せられて居たのであらう。

此語は口語では殆ど用ひられぬ。しかも之に相當する助語がないから、意味の近いデモ又はサヘが代用せられ、爲に上記のスラと混同せられたが、兩者の間に相違のあることは勿論で、上揭の證歌に於ても「煙スラたて」、「乾きスラせよ」といふことは出來ぬのである。

サヘ。　ソウヘ（其上）の約であらう。――ソヘ（副）の轉呼とする說もあり、萬葉には「副」をサヘの假字に充てた例もある。――いづれにしても「亦」の意なることは明である。例

（萬六）橘は實サヘ花サヘその葉サヘ枝に霜ふれどいや常葉の木

（同一六）あさか山かげサヘ見ゆる山の井の淺きこころを我が思はなくに

（古今）あづさ弓おして春雨けふ降りぬ明日サヘ降らば若菜つみてん

然るに中世以降上記「尙」の意のスラと同樣に用ひられるやうになつた。例

（後撰）今日よりは夏の衣になりぬれど着る人サへはかはらざりけり

（拾遺）めづらしき年にはあれど鶯のなく音サへは變らざりけり

口語では一層廣い意味を含み、ダニといふべき場合にも之を用ひる。例

（イ）原義によるもの。　水サへ喉に通らぬ。　雨サへ降り出した

（ロ）スラの意なるもの。　聞く私サへ腹が立つ。　子供にサへ出來る

（ハ）ダニの意なるもの。　飯サへあればよい。　讀むサへ骨が折れる

しかしながらスラ、ダニは必しも常にサへと譯すべきものでないことは上記の通である。

ガテラ（カテリ）。　カテ（加）アリの約轉で、カタカタ（旁）の意である。古はカテリの形に於ても用ひられた。例

（萬一）山邊の御井を見カテリ神風の伊勢をとめども相見つるかも

（同三）雨降らずとの曇る夜を濡れひづと戀ひつつ居りき君まちカテリ

（同七）吾が舟は沖ゆなさかり迎ひ舟かた待ちカテリ浦ゆこぎあはむ

右は尙動詞と見ることも出來るが、夙にガテラと轉呼して助語的に用ひられた。例

（萬一八）梅の花さきちる園に我行かむ君が使をかた待ちガテラ

（萬一九）吾妹子がかたみガテラと紅の八しほに染めておこせたる衣のすそも

（古今）わが宿の花見ガテラに來る人は散りなむ後ぞこひしかるべき

此語は現代の口語に於ても花見ガテラ、凉ガテラの如く用ひられる。

ガネ。　カネテ（豫）、カネコト（兼約）等のカネと同語で、豫め充當することを意味する。例

（記下）高ゆくや隼別の御おすひガネ

（萬三）ますらをの弓末ふりおこし射つる矢を後見む人は語りつぐガネ

（同一七）音のみも名のみも聞きてともしふるガネ

此助語は夙に廢れたが、后ガネ、聟ガネの如く其位置に豫定せられた人といふ意を以て熟語として用ひられることがある。

ノミ。　語原を詳にせぬ。「耳」「而已」といふ字の訓に用ひられるが、其字の有するヤム（止）といふ意味は少しもなく、タダ（止）といふ意があるのみである。或はミナ（皆）の反對を表示する爲に之を轉倒してナミとし、更にノミと轉呼せられたのではあるまいか。奇警に過ぎる嫌はあるが、次の例の如きは「皆」の反對卽ち特に然ることを表現して居る。

（萬五）人皆か我ノミやしかる

（同三）世の中はかくノミならし

（允恭紀）ささらがた錦の紐をときさけてあまたは寢ずと唯一夜ノミ

此意味から一轉して第三例のやうに上にタダといふ語のある場合は勿論、ない場合にも「唯一」の意に用ひるやうになつたものと思はれる。例

（萬三）日のことごと音ノミを泣きつつありてや

（古今）知るしらぬ何かあやなくわきていでむ思ノミこそしるべなりけれ

（同）音にノミきくの白露よるはおきて晝はおもひにあへず消ぬべし

口語では多くは次のバカリを以て之に代用するが、兩者は本義を異にするから、左記の如くバカリとノミとをつゞけて用ひた例もあるのである。

（古今）山の井の淺きこころも思はぬに影バカリノミ人のこゆらむ

バカリ。　計、謀、量等の意のハカリと同語で、助語としても本初は分量を表現したもののやうである。例

（萬五）行く舟をふりとどみかねいかバカリ戀ほしくありけむ松浦さよ姫

（同二）かくバカリ戀ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なましものを

ココバク（許多）、イクバク（幾許）、ソコバク（若干）の如く用ひたのは恐らくはハカリの語幹ハカの轉呼で、バカリを約したのではあるまい。口語でも「少しバカリ」の如く用ひられる。

右の意から轉じて「二十バカリ重ねたる」「曉バカリうきものはなし」「八月十五日バカリの月」のやうに、ホド（程）とも、コロ（頃）とも、或は俗語のクラヰ（位）の義にも通はして用ひ、更にワツカ（僅）、タダ（只）の意に轉じた。

此語が常にハを濁るのは原語ハカリ(計)と區別する爲であらう。――次のダケも同樣である――口語ではバッカリ、バカシ、バッカシ、パチ、バチとも轉呼せられる。

タケ(丈)といふ語もまたハカリ(量)と同じく丈量の意を以て「てゝらは膝ダケある着るものなり」(醒醉笑)の如く助語的に用ひられ、バカリがノミに轉用せられて以來、之に代つて標準卽ちホド(程)の意を表示し、「勉强するダケ學問が進む」「近いダケよく聞える」の如く用ひられる。

口語では又此ダケにシカといふ助語を添へて「一つダケシカない」「私ダケシカ知らぬ」の如く用ひることがある。此シカは助語ヨリとも連なり、或は單獨でも同じ意味を表示することがあるが、――例「小錢ヨリシカ持たぬ」「小錢シカ持たぬ」――恐らくはダケシカの畧で、シカ其ものに局限の意があるのではあるまい。土佐日記に「一文字をダニ知らぬものシカ足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」とあるシカと同一用法で、原義は「其ガ(シ)」であらう。

ナド。 ナニゾの約である。ナニゾは不定の事物をさす語で、京畿地方では「ナンゾ欲しい」のやうに用ひる(關東では此場合ナニカといふ)。助語のナドも同じ意味で、或る語(句)について「其他」「等」といふ意を表示し、或はわざとおぼめかしていふに用ひる。例

(枕草子)覺ある人の子供ナドは雜色ナドおりて馬の口ナドしてをかし、馬にナド乘りて

(川柳)釣れますかナドと文王そばへ寄り

「お茶ナドめしあがれ」のやうに用ひるナドはナリトモの約濁である。

校正責任者　中川恭次郎

日本古語大辭典の序、紹介、推薦、批評

(順位不同)

三上參次

予と鄕國を同じうせる友人松岡靜雄君は一の奇才である。君の長兄松岡鼎君の醫學に於ける、次兄井上通泰博士の眼科と歌學とに於ける、三兄柳田國男君の土俗學・民族學に於ける、令弟松岡映丘君の繪畫に於ける、孰れも第一流の大家である。一家兄弟此の如き人材揃ひはまことに稀有の例である。その中にありて、靜雄君は夙に海軍軍人となられ、大佐とまで昇進せられたが、病痾の爲めに致仕せられた時には、可惜人物を遺憾千萬だと思つたが、君は病を養ひながら、兼ねて深く研究して居られた南洋地方の言語・習俗等に關する書を著はされ、次いで日本言語學・日本古俗誌・播磨風土記物語・常陸風土記物語・ミクロネシア民族誌・カロリン語の研究等を公にして、いづれも識者の好評を博せられた。其の播磨風土記物語を出だされたときには、予は之に序して、書名は物語として謙遜して居られるが、實は史學・考古學・言語學等の深邃なる研究の報告であると、敬服せるまゝを識したことである。續々として學術界にかかる好成績を擧げられるので、曩に海軍生活を罷められしときに、可惜と思つたのは誤りであつて、君の本領は、或はこの方面に在るのでは無からうかと考へるようになつた。今や、君が新たに公にせられたる日本古語大辭典を一閲するに及んで、彌よこの考を深くするのである。

君は旣に言語學の素養があり、南洋語の智識があり、史學・考古學・人類學・地理學等に造詣の深きものがある。之を基礎として、博く古典を涉獵して、徧く我が古語・人名・地名等を搜り、之を解釋せられたるものが卽ちこの日本古語大辭典である。近年國語の研究が甚だ盛んであつて、隨つて辭書の編纂せられたるものも尠くない。そは孰れも大なる努力の結果と認めらるべきものである。されども君のこの大辭典は、從來の辭典の型を

破つた一種獨創的のものである。古事記・日本紀・萬葉集等は勿論、奈良朝・平安朝の典籍に見はれたる言語を解釋し、其語源を詮索したものであつて、眞に言葉の研究である。また是等古典の集約的註釋書とも看做されて、かた〳〵學者の參考とすべき奇書であると同時に、自己の研究に古典を引用せんとする一般學徒の爲めに、便利なる案内者となるものである。況んや、各方面に亙れる廣汎なる智識に基いての言語の解釋は、人名・地名等の說明と相須つて、我々の祖先の信仰生活・社會生活・經濟生活等をも紙上に髣髴せしむるものがある。

就中訓詁篇に於ける萬葉集の如きは、四千五百餘首のすべての原歌を揭げて、之に訓詁を加へ、從來の誤讀の個所をも突破せられたる手際の如きは、令兄井上博士の壘を摩せられたかの感がある。

君は從來、我が國語は格・時・法の精緻微妙なる點に於て、インド、ゲルマン語に比較して優れるものあるに、國民が之を尊重せざるを慨いて居られるが、言靈の幸ふ國といふ古き言葉も、かゝる見地より論ぜられてこそ、彌有難味を覺える。又君は、昔、漢字が用ひられてから、人々、國語を知るよりも文字を知ることが當面の急であつたから、そこに國語に對する國民の觀念の誤りがある。その弊は今日に至つても依然として著るしい。須く文字と言葉とを區別して、國語の整理を圖るべきであると言つて居られるが、是等の用意も、この大辭書の所々に窺はれるように思ふ。そも〳〵學者が言葉の解釋をするに當つては、或は國語それ自身の分析說明を主とし、或はアイヌ語・朝鮮語・支那語・滿洲語、若くはそれより南方・西方の諸國語のうちに、同一語又は類似語を求めて說明する。それは當然の事である。然るにその方面の研究に沒頭すると、どんな人でも、之に釣り込まれて、その方面の說明を主張し過ぎる傾があるようである、この陷穽には、殆んどすべての語源學者が足を踏み入れるように思はれる。或は全く穽に陷つてしまつて、出ることが出來ず、この學者にしてこの態度はと訝らしめる人さへある。如何に博識にして穩健なる松岡君といへども、此の種の疵瑕が絕えて無いとは思はれない。如何となれば、これはこの難事業に於ては、何人といへども免れることの出來ない困厄であるからである。是に於て、君は、この書を公にするは請ふ隗より始めよの自薦の類であつて、以て、完全なる標準辭典の出現するのを待つのであると、奥ゆかしく謙遜して居られる。彼れといひ此れといひ、予はこの書の公にせられるのを喜び、この同鄕の友人のために、又廣く學界のために、玆に推奬の言葉を敢てするのである。

上田萬年

明治廿年頃の事と思ふ、私は恩師チャンブレン氏の助手として、萬葉集語彙を集めたことがある。其の當時から、萬葉集以外の古典の上にある、總ての日本語彙を完全に集めたいと思つて居たが、此の仕事は、材料の蒐集から分類まで、自分で目を通さなければ承知が出來ぬのでつい今日までそのまゝになつて居た。然るに此度松岡君の日本古語大辭典が出版される事になり、刀江書院主から其の假綴本を見せていたゞいて、私は我事のやうに非常に嬉しく感じると同時に、松岡君の周到な用意と基礎的な取扱方に、滿腔の敬意を表する事である。昭和の御代の國語學界は、かゝる專門的辭書の出現によつて、一大光明を得たと申してよからう。猶、よけいな小言かは知らぬが、一寸書き添へておきたいのは、近頃だん〳〵と種々の學者が、種々の日本語起源論を出されるが、日本語の上で、先づ此の松岡君の研究を豫め讀破してから、出直してもらひたい事である。

新村出

多年の海洋生活より一轉して南洋の民族言語の研究と日本の古言古俗の考察とに進出し、既に是等兩方面の業績少からぬ松岡靜雄氏は、いま日本古語大辭典を公刊し、曠古の大事業の完成に向つて一歩を履みすゝめられた。之に由て著者は、將來に對して、規範的見地よりすれば、皇國の標準語辭典の礎石を置いたもの、歷史的研究としては、日本の語原辭書の素材を供したものと云はれようが、また現代に卽してなら、古典學的には、古語解釋の根抵を作つたもの、實用的には、國語の研究者敎育者の指針を授けたものと稱することが出來よう。卽ち此の辭書が日本の語史學上未曾有ともいふべき一大編著たることは多言を要しない。

殊に語原の攷證に關して、精緻なる分析、犀利なる洞察、透徹せる識見、高邁なる論斷、恂に敬服に價するものがある。訓詁の採定、原語の分解、出典の引擧、先說の參照、異論の檢討、それぞれ要諦を得てをり、且つ古語中の固有要素と外來要素との識別判定も亦穩當に近い。尤も語原論などについて、著者の

所見と私一個の所見とは、相違せる場合も往々存するを免れないけれども、それはそれとして、私は向後自分の語原研究を進むるに當つて、此の書より受くべき裨益の決して少からざるべきことを豫め期待する。假りに著者獨創の新異なる見解から離れて見ても、此の辭典が、普く人々に種々の便益と啓發とを與へて、國語學界に貢獻する所甚だ大なるべきことは、何人も否むことが出來まいと思ふ。(昭和四年四月九日、東京にて、新村生)

幣原坦

日本古語大辭典の編纂は最も困難にして、又最も忍耐を要する事業である。然しながら、我が國語を完全にし、語義を明かにし、又國語の獨立的權威を樹立する上には、多大の貢獻をなすべきことを期待せらる。

從來多くは文字の事にのみ注意して、言語の事を閑却し、又たとひ言語の事に注意するとしても、寧ろ外國に通じて、我が國を閑却するやうな傾向があつた。隨つて、日本に有る言葉でありながら、それを使はないで、態々外國の言葉を用ふる人々も少くない。

然らば、外國の言葉が尊くして、日本の言葉が卑しいのかといふと、斷じてさういふ道理はない。外國の言葉が豐富にして、日本の言葉が不完全なのかといふと、これまたさうでもないことは、昔から言靈のさきはふ國とまでいひならはして來てゐる。萬一不足を感ずるやうな場合がありとするならば、新にそれを我が言葉で工夫するまでのことである。それをしないで、唯漫に外國の言葉を使用するのは、これ國民の一の恥辱ともいふべきである。

かやうな次第で、我が國語の淵源を尋ね、語義を明かにし、古今の連絡を諒解し、言語を純潔ならしめ、又それを豐富ならしめる爲めには、日本古語大辭典の如きものゝ完成は、實に有益であるといはねばならぬ。

日本古語大辭典は、このやうな方面に貴重なる價値を有するのみならず、更に成句の說明をも試み、又訓讀をも正すといふのであるから、言語以外の學問にも、大なる裨益を與へるであらう。自分はこの大辭典の編纂によつて、學界は勿論、その他種々の方面において、自覺と進歩とが、促がされることを推想して、慶賀するものである。

幸田露伴

國語の尊重せねばならぬことは言ふまでもない。國語は吾人の生命であり系統であり歷史であり精神であり體軀であり家であり邦である。

然し言語は活體である、死物ではない、そこで原始のまゝに化石したやうに永存恒在するものではない。發達もする、變遷推移もする、進化もする、退化もする、外のものを同化もする內みづから分裂したり複合したり、抽出したり伸展したり、或は侵蝕、汚染、溷濁を、時間より蒙つたり風氣より被つたり、地方關係より受けたり、種々の因や緣より種々の相や果を生じて、あらゆる錯綜せる事情の下に、あらゆる應酬の作用を爲して、そして父母となつては兒孫を遺し、兒孫と遺されては又父母となつてゆくのが、言語其物の常である。いづくの國語も此の約束には漏れない。

此の意味からして國語の本眞の姿を見ようといふ上からも、又國語の推移の迹を考へようといふ上からも、又國語に對して懷くべき深い〳〵尊重の情と敬愛の念とより其の本然的發達を望む上からも、又現在の國語に對して正當な解釋と判斷とを下さうとする上からも、我が國語の正系的源頭たる古語を見詰め見決める要のあることは自明の事である。

自分も我が國語の檢討研究に就いて或企圖を懷いて居るが、今や松岡氏の此の古語大辭典を見て欣快の念に堪へぬのである。もとより書中の細部の一々に就いては見を異にすることも有らうが、其の多大の勞苦より成る網羅蒐集の豐富と、其の解釋批判が從來の學者の取つた徑路以外に出て居ることの多いのと、又普通には埒外に置かれた固有名詞を包含しての檢覈とは、自分をして手を額にし眉を揚げて其の欣慶の情を露はすを敢てせしむるに足るものである。

不快にも今日は國語を溷濁と混亂とに導かんとする風氣が動いて居る。此時に當り此書の成つたことは、特に又或意義の冥冥の中に萠してゐることを思はせる。これも又一快心の事である。

坪井九馬三

本邦に於ても學術は明治年間に至り進歩の氣運に向ひ百般の

學科は新規の機軸を出だして古來未踏の境地を拓いたが獨り國語學のみは此の氣運に觸れず世界文化の刺戟を被らず契沖宣長の舊態を守り其の範疇を脱する能はず其研究法を轉ずる能はず他の諸學科が日進する波動の裏に獨り靜寂を樂み徒に歲月を經たれば今に及びて甚しき落伍を示す姿である。國語の先覺松岡靜雄君は夙に一般國語家が其の專攻の學科に精進する氣力を缺くを慨きドイツ流の近世エウロパ語言語學を參考するも國語の研究にはさしたる補益なかるべきを洞見して國語研究の爲に獨特の方鍬を立て頃日日本古語大辭典の纂述を計畫し書林刀江書院其公刊を擔任したれば此の書は世に出でんとす。松岡君は鄭きにマリアナ、マアシアル、カロリナの如き僻遠なる新版圖の方言をさへ國語の範疇に收めて研究せられ尙ほ進んでインドネシア、前インド各地の方言を參照せられんとする道程にあり。抑も千年後の今語に基きて千年以上も昔の古語を遡りて學術上に研究せんとするは至難の業である。此業を遂行せんとするには種々の準備を要するが取り敢へず先づ以て行ふべきは國內の各地に殘存する諸方言の調査である次では神代の太古より奈良朝時代の頃に至るまで海を隔てたりとは申しながら隣接の位置にある諸國より內地に移住したるべき同系又は異系の諸國語の比較調査である。然に契沖宣長等の諸先輩は此の二種の調査を行ふ素養もなければ便宜もなく只古書を讀みて自己一流の狹隘なる見解を下すより他に研究の途なかりしなり。されば今日より觀て維新前の先輩の學說にいかゞにや思はるゝ臆斷ありたりとて妄に之れを怪むべきに非ず。明治昭和の國語家が依然として舊說を遵奉し子弟に授くるを見るとするもあながち之を咎むべきに非ず明治昭和の國語學は實質に於て元祿寬政の國語學と異なるところがないからである。今や世界文化の刺戟の裏に人知れず靜に研鑽を遂げられたる松岡君は其の底蘊を盡して日本古語大辭典を纂述し之れを刀江書院に託して世に公にせらる。元祿以來おどみ固りたる國語家の陋說は之れに由りて消散すべく諸科學に追隨する活氣なき今日の國語學も之れに由りて幾許か元氣を養成するを得ん歟。日本古語大辭典の出づるを喜ぶのあまり一言を述ぶること斯の如し。

金澤庄三郎

我國語の語原に關する著述といへば、古今を通じて、兎角獨斷の弊に陷り易く、牽强附會の譏を免れるものは殆んどないといつてもよい。これは我國にまだ比較言語學といふものが發達してゐないで、同一系統の言語が組織的に調査せられてをらぬといふことが、主なる原因であるといはねばならぬ。それ故、語原辭書として多少とも信賴すべきものゝ出現は、まだ〳〵遠き未來のことであらうと考へてをつた。私自身も、年來アイヌ・朝鮮を始とし、滿蒙などの諸語の研究に沒頭してゐながらも、語原辭書としては、漸く倭名抄を底本として上記の諸語との比較探究を試みてゐるに過ぎない。しかも其公表までにはまだ兩三年を費さねばならぬといふ程度のものである。然るに、今日松岡氏の力作「日本古語大辭典」の出版を見て、私の豫想が全く裏切られたことを、我學界のために深く喜ばざるを得ないのである。氏と私とは我國民族の起原などに就ては必ずしも說を同じうしてゐないやうであるにも關らず、氏の語誌中の所說に往々私見と符を合するが如きもの——例へば童(おぐな)と翁(おきな)とを對立せしめたことや、伊弉諾、伊弉冊二尊の御名義をイザノアギ、イザノアミと解してあるなど——のあるのを見て、私は其研究の眞摯にして態度の中正なることを感ぜずにはゐられない。もとよりこの種の著作に於て全部意見の合致するといふことは到底望み得られぬところで、私の見解と異なる箇處の多いことは勿論であるが、私は本書を以て近來稀に見る名著であつてこれを我學界の一大收穫なりと斷言して憚らないものである。

藤村作

日本の古語を知ることは、日本國語の眞の相を知り、現代日本語の眞の理解の爲に必要なことである。又日本の古典を讀む爲に、隨つて日本人我々の自身を知る爲に必要なことである。古語の研究をば死語の無益な好事的な閑事業と解するのは、甚だしい短見であるといはねばならぬ。今松岡靜雄君獨力を以て日本古語大辭典を編纂された。その勞、その功誠に稱すべく、嘉すべきである。

思ふに、漢字を用ひて記錄する我が國語に在つては、辭書と共に字書の必要がある。本書が「語誌」篇と共に「訓詁」篇を有する所以はこゝに在る。

古語を解することは容易ならぬ難事である。如何なる人がなしても、釋に訓に多少の獨斷は到底免るべからざる所である。よしそれが獨斷であつても、全體の考察、推斷にして眞摯な學者的態度を有する以上、尊敬すべき獨斷であるといへよう。本

書が一般に有益であることは言ふまでもなく、專門學徒の爲にも幾多の斷定と、暗示と、問題とを與ふることも疑なきことと信ずる。

松井簡治

今回松岡氏の日本古語大辭典が發刊された。氏は曩に日本言語學・日本古俗誌・常陸、播磨兩國の風土記物語等諸種の書を著はされて、既に世に好評があり、今亦此の辭典を編纂されたのである。

此の書の特色は普通の語彙ばかりでなく、人名、地名等の固有名詞をも擧げ、氏獨特の見解を以つて語源に遡り親切に說明されたものである。尙別に古典の訓詁及語法要錄が續刊されたことは古典研究者にとつての福音であつて座右に缺くべからざるものであらう。

辭書の編纂は實際に從事したものでなければ、其の苦心の程は解らない。自分も其の事に多少經驗があるから、此著に對して深い同情をもつて敬意を表するのである。

山田孝雄

松岡靜雄氏の日本古語大辭典成りて意見を徵せらる。余、松岡氏と面識なし。然れども夙くその著を通じて尊敬すべき學者なりと思へり。面識の有無を以て遽に辭すべからざるなり。

抑も本書の如きは精到なる學識と多大の刻苦とを要するものにして、何人も之を企て何人も之を成しうべしといふ性質のものにあらざるなり。余は先づ之をわが學界に得たることを慶賀せむとす。本書を閲するに普通の語はもとより神名、人名、地名等に及びて、古典にあらはれたる語を網羅して、一々著者の研究の結果を記載したるものにして、世に所謂辭典と稍性質を異にし寧ろ辭典の形式に整頓せられたる研究錄といふべきものなるべし。この故に、その著作の勞苦は尋常の辭典の比にあらざるなり。

余は玆に再びいはむとす。余は實に國家の爲にこの不急の書を得たること慶賀するものなり。余は敢へて本書を不急の書といふ。今の所謂思想の善導思導に狂奔する徒にとりては眞に不急といはざるべからざるを以てなり。されど、かゝる不急の書

の著述に沒頭する著者と、かゝる不急の書を刊行する書肆とを有することはわが國家の健康を證するものとしてこの點よりしても慶賀すべきものたりといふなり。

余は敢へて本書を不急の書といへり。不急の書たることは一面に於いて永遠の生命を有するを語るものたり。本書は上にいへる如く、著者の研究錄たれば、そのある部分につきては世の贊否さまゞ〳〵なるべし。然れども、著者以前に何人かこの事を企てし、又何人か著者以前にこの事を成したりし。この點に於いて本書はわが古典研究に、はた古代研究の爲に投ぜし一大炬火といふべきなり。これ余が敢へて本書の推薦を辭せざる所以なり。

吉澤義則

曩に日本言語學を著はして國語研究上に獨自の見地を建設せられた松岡靜雄氏は、今また語源探求に基礎をおいて日本古語大辭典を著はして、多年の蘊蓄を公表せられた。

本書は語誌、訓詁の二篇より成り、別に附錄として語法要錄一篇を添へ、記・紀・萬葉・風土記以下日本靈異記に至る諸書の中から難解又は未解決の語句を殆ど收錄し盡して、それに忠實な釋義と攷證とを加へたもので、あらゆる新知識を應用した著者獨特の新見解と新提言とに充ちた良書である。

勿論「はた」は「また」と同根の言葉であるかも知れぬ。が、普通說かれてゐるやうに「また」「または」「或は」といふのではなく、別に特異の意味に於て用ひられてゐたやうに思はれるし、また「いつしか」といふ言葉は「いつか」といふ言葉と同じやうに說かれてゐるのが常ではあるが、王朝時代にはさうは用ひられてゐなかつたやうであるし、萬葉時代にも、同斷であつたらしいのであるから、それらに就いても考ふべきものがあるのでは無かつたか、と思はれるといふやうな些少な望蜀感の一二が無いではないけれども、著者もいつてゐられるやうに、學界の現狀では、遺憾ながらその解決に完全を望むべき時機に至つてゐない今日にあつて、一人の力を以てして、かくまでに成果を收められたといふことは寧ろ不可思議とさへ思はれるのである。

この頃、助辭の「だに」「すら」の用例研究を學生に課したのであるが、何れも、期せずして、その語源を考へることによつて、最後の斷案を求めようとしてゐるといふ事實を見た。語源

探求といふことは、國語を徹底的に理解しようとする者の必ず趨かざる可からざる境地のやうである。國語を徹底的に理解することは國語愛着の念を燃えしめる所以である。國語愛着心は國民親和の力を強める所以である。國語教育の重大視せられる所以もまたこゝにあるのであつて、國語の教育は、諸外國語のそれのやうに思想交換の一具として授けられるのが、終局の目的では無いのである。

本書は學者や教育家が精讀しなければならないものであることは言ふまでもないが、また如上の意味に於て、この一本を弘く國民一般の座右に奬めて、以て國語を徹底的に會得せしめたいと思ふのは自分一人ではあるまい。

米田庄太郎

開國以來數十年間、現代世界文化を吸收して、我國民文化を眞に世界的國民文化として發展させる、最とも有効なる一手段として、我國民は今日まで歐米の諸國語を學ぶ爲めに、實に多大な勞力を費やして來た。そうして同じ目的の爲めに、今日も亦今後もヤハリ歐米諸國の國語の學修を怠つてはならない。併し今や我國民は世界的一文化國民として、世界文化に積極的に貢獻す可き時機に達して居る。そうして此の新しき目的を實現する爲めには、吾人はよく我國民精神の本質、我國民性格の特性を意識せねばならない。然るに之を十分明確に意識するには、國語の研究は最とも有效なる一手段である。

此際國語研究に於て、我が松岡氏の如き稀代な篤學者の現はれたことは、我國民發展の新機運の一象徴として、余は之れに多大の興味を感じ、又同氏の勞に對して大に感謝するのである。同氏はさきに「日本言語學」を公にして、國語研究上幾多の卓越せる創見を發表されたが、今や更に進んで、畢世の大事業として、「日本古語大辭典」を編纂し刊行されんとするを、發行者刀江書院主尾高氏より聞知し、同書大成の上は、我古語の研究に、更に我國民精神、我國民性格の淵源の闡明に、貢獻する處甚だ多大なるを確信して、余は松岡氏に深甚な敬意を表すると同時に、同氏の健康と成功を希願するのである。

濱田青陵

言語は生命を有し、發達變化すると共に、古代語は過去の遺物として、一種の考古學的資料と云ふことが出來る。私共は言語の學に全く門外漢である丈けそれ丈け、斯の如き古代語辭典の出現に由つて利益することが大である。世間が若し從來考古學者が其の研究に、古代語を資料として使用することに充分でなかつたと我々を責めるならば、斯の如き辭典の出現が其の道の學者に由つて早くなされなかつたことが一因であると、遁辭を設けることが出來たのであるが、今後は之を許されなくなつたとも云へやう。

高野辰之

わが古典の普通品詞以外に、人名神名地名や成句までも收めてある此の日本古語大辭典は甚だ以て實用に合ふ。實用に合ふ辭典は、とかく在り來りの說の取合せに終始するのであるが、此の書には堂々と自說を述べてあつて、それが創見に富んでゐる。創見は、とかく奇矯に走りたがるが、此の書のは正確妥當のやうに見受ける。

此の書が現代辭典界に於ける地位に關しては、辭典に苦勞された諸家から批判と推薦とがあるべきを思ひ、私は歌謠舞技音樂といつたやうな方面から見て、大いに研究上の授助を蒙り得ることを叫ぶ。敢て記紀萬葉の訓詁註解の書が堆高い量を有してゐるが爲に、かういふのでない。神樂や催馬樂の歌にしても、分厚な註釋書になつてゐる。其の幾十冊を机邊に並べたり積んだりする煩しさは、此の特殊辭典によつて一掃されるのである。之を思ふと、推薦どころか感謝の意を表したい。

津田左右吉

言語の學について何の知識をも有たない僕には、此の書に對して云爲すべき資格は、全然、無い。たゞ僕のいひ得るところは、古典を研究し又は取扱ふ場合に此の上も無く便利な書物であるといふ一事である。此の書を座右に備へることによつて、どれだけか檢索の勞を省かれ、どれだけか比較對照の便が與へられ、どれだけか考察の手かゞりが得られることであらう。よし此の書の解釋に於いて同意しかねる點を發見する人であつても、このことには毫しの異論があるまい。僕の如きは、まつさきに此の書を利用して、著者が苦心の賜を享受しようとする一人である。

島崎藤村

自分はこれまで人のもとめによつて推薦の言葉を述べたことがない。その自分が進んで松岡氏の新著のために、僅かの言葉をこゝに書き添へようとするのも、この書の著者に對する深い感謝の念からである。

言葉の研究は我國に於いては最も惠まれなかつた學問の一つである——著者はその見地から出發して、古語の研究が現代生活と直接の交渉がないと考へるものがあるならばそれこそ大なる誤であるとの結論に達した。『日本古語大辭典』は單なる辭典でもなく、語誌でもない。この書の中にあふるゝものは好學探求の新精神である。著者はその光景を私達に指摘して見せて呉れた世にも稀な篤學の人だ。假令この書の中には幾多の宿題として殘さるべきものがあるとしても、私達はこれほど大きな仕事をした著者に對して感謝しなくてはならぬ。

窪田空穗

從來「古語」に對する解釋書は幾種類も出版されたが、凡て一長一短の譏をまぬかれず、その道の者をして隔靴搔痒の感を抱かせて居たが、こゝに古代研究の造詣研讃深き松岡氏の日本古語大辭典を得て從來の不備が一掃され、後學に益する事の多大なるを信じ誠に喜びに堪えない。

保科孝一

我國體の精華を發揮し、國民的精神の養成を達成するに當り、古典の研究より急要なるものはない。古典の研究を閑却して國民思想の善導を期するがごとき、おそらく水中に畫くに類するものであらう。わが古典の研究はもとより決して容易な業でない。德川時代に至りて國學大に興起し、訓詁の學にわかに發達して來たので、はじめて記紀萬葉祝詞宣命風土記等を通誦することが出來るようになつたものの、あまねく訓詁に關する典籍を集めてふかくこれを改究することは常人のきわめて困難とするところで、今日古典の學の振わないのもあながち無理とはいえない。しかしながらもし古典に關する一大辭典を編述してこれをひろく世に頒つことが出來たならば、如上の困難を救うことがかならずしも難しとしないのである。

今日わが古典を研究するに當り、數多の註釋書を集めて比較參照するの勞苦は實に大なるものであり、しかもその間當を得ない訓詁や正しからざる語釋に誤まられる恐があるのみならず、語學上低級な常識によつて獨斷に陷るような禍も少なくないのであるが、もし古典に關する一大辭典が出現すればはじめてこの疾患から免れることが出來るのである。

古來わが國においては各種の辭典があらわれて居るが、古典の研究を目的として編述されたものはまつたくない。しかるにこのたび松岡靜雄君が古典の研究を目的として編述した日本古語大辭典を公にせられるに至つたことは實に學界の一大慶事であつて、かねて古典の研究に志ある人に取りてはまさに暗夜の燈火より以上の福音であると信ずる。

本辭典は正續二卷より成り、正編は語誌篇、續編は訓詁篇であるが、その語誌篇に採取された語數は約一萬二百餘で記紀萬葉・祝詞宣命・風土記・神樂・催馬樂等の古典から取集めたものである。採錄の語には神名・人名・地名等まであまねくこれに網羅し、これに語訓・原語・語義・釋明・出典および考證の數項を設けて、說明を與へ、その訓詁篇には記紀萬葉等の訓詁を揭げもつぱら先哲の解明釋義を紹介してゐる。

以上に於ける、本辭典の大綱を見るに、普通一般の辭書においては語義を簡潔に說明し、これに多少の出典を揭げ、一とうりの理解を與へるに過ぎないから、その語義に對して各種の異說の存するもののごときこれを檢討攻究するに由ないのであるが、本辭典では語の構成を研究してその原語原義を明にし、さらに進んで轉義轉用を詳にしてこれに對する正當な理解を與へようと努め、尙その間先哲の訓釋にして異說の存するもの、あるいはその當を得ないと認められるものがあれば、比較檢討して嚴正な批判を與へ、これに改訂を加えて居るから、語義に對する理解とともに語學上の識見を養ふことが出來るのである。もちろんわが國に於ける語原論は今尙すこぶる幼稚で、語學的の研究が未だ十分に進んで居ないからやゝもすれば私見臆測の獨斷に陷り易い傾きがあるが、それは今日のところけだし止を得ないことであらう。

本辭典は古語に對する一とうりの理解を與へるのが目的でなく、むしろこれを批判的に研究考慮せしめようとして居るところに著者の一大苦心が潛み、本辭典の一大特色が存するのである。ただしいさゝか望蜀の嫌はあるが、出典をもう少しく豐富に採錄せられたならばいよ〳〵以て至寶たるに至るであらう。

たとへば「オクツキ」のごとき萬葉その他における用例をあまねく提示せられたならば研究者に取つて一層便利なものになることは言うまでもない。本辭典はすでに語誌篇だけで千四百有餘ページの大卷であるからあまねく出典を掲げることはあるひは無理な要望であるかも知れないがしかしこの種の辭典としては是非これを實現せられんことをあへて希望する。

著者松岡君は身を海軍に起し、後職を退いて日蘭親交事業に從事されたのであるが、その間國語の研究に心を潜め、さきに日本言語學を著わし、斬新にして卓絶せる識見によてこの道の學者に一大刺戟を與えられ、あるいは日本文法についても、傳統的な舊來の定型を打破して著者獨自の創說を發表せられたるがごとき、われ〳〵の深く多とするところである。きくならく著者近來ひさしく病床にあり、しかもその間たえず病苦と戰いつゝ一日片時も無爲に居ることなく、先進の未だ企て及ばざる本辭典のごとき空前の一大事業を完成せられるに至つたことは、まつたく著者不斷の努力と不屈の精神の致すところでまことに敬服に堪えない。

小倉進平

松岡靜雄氏はもと海軍々人であり、夙に南洋方面の言語土俗の研究に沒頭し、ミクロネシア族カロリン語に關する著作あり、又日本の言語、習俗の領域に犂鋤を入れて『日本言語學』『日本古俗誌』常陸、播磨兩風土記物語その他の大著を公にせられたことは世人のあまねく知る所であらう。その矢つぎ早なる發表、しかも毫も世のいはゆる賣文の徒の類にあらず、材料の蒐集豐富にして組織の上に統制あり、言々ことゞく〳〵く透徹せる識見の發露にあらざるなく一たびこれ等の書をひもとく者をして正に澄泉より滾々として湧き出づる清洌なる流水をくむの思ひあらしめる。今回公刊せられた『日本古語大辭典』の如きもその盡きざる流れの一飛沫と見るをうべく氏の底の知れぬ蘊蓄の程も察せられて傾慕の念やみ難いものがある。近時國語の研究が盛んになつて來て、各種の辭書が編纂せられるが、本書の如きはそれ等と餘程おもむきをことにするものであつて、古事記、日本書紀、萬葉集、各種風土記その他奈良朝平安朝の典籍にあらはれた普通名詞は勿論神名、人名、地名等に至るまで

これを採錄し廣く先學の意見をも參照してその構成、原語、原義につき著者一流の犀利なる攷證と力强き論斷とを加へられたものであり、我國語學にはたまた文獻學上最も價値ある勞作の一たりといふを失はぬ。そのうち語原に關する部分は學者によりなほ異論は多からうが著者の最も精力を注ぎかつ最も自信の存する部分と稱することが出來よう。著者は序說において國語研究の方法につき論じてをられるがそのうちに、我國にありては漢字傳來以來、世間は言葉を研究するよりも文字を知ることが當面の急となり文字を學べば言葉は自ら判るといふ誤つた考へが國民の頭に植つけられ、それが今日の國語教育にもわざはひしてゐる。語原を說くに當つても、漢字に捕へられた解釋乃至從來の反切延約、音義說に偏し過ぎた說は無條件に受入れることが出來ぬといふ意味のことを述べられて居る。これは耳新らしい意見のやうにも聞えるが、寧ろ當然の理論である。自分も常に考へて居る。凡そ漢字を使用する東洋の諸言語、殊に日本語、朝鮮語等の語原を檢討するに當つては漢字といふものから全然絕緣して考察する必要があると。言葉は精神であり、肉體である文字は着物であり裝飾である。着物や裝飾が同一であるからといつて直にこれを同一物とするのは誤りである。記紀萬葉等の古典を、それにあてはめた漢字にのみ意味あるものゝやうに考へて解釋を施すのは一種の迷ひである。日本語の語原を論ずるに當つてはすべからく漢字といふ着物を脫ぎ棄てゝかからねばならぬ。國語なるものを赤裸々にして客觀的に冷靜に見直す必要があるのである。かくしてうつはぎにせられた日本語なるものが、その結果において、いづれかの卑俗なる言語と關係を持つに至らうとも、それは最初から覺悟せねばならぬ事なのである。國語の語原を國語內においてのみ求めようとするのは、たしかに從來の國學一點ばかりの學者の通弊であつたといはねばならぬ。著者が本書の語原を說くに當たり、南洋語、朝鮮語、アイヌ語をも廣く參取したのは、著者が平素抱懷せらるゝ學問上の主義を實現せられたものといふことが出來よう。

國語々原の詮索は難事中の難事である。到底一ケ人の力を以て一朝一夕に片つけうべき性質のものでないことは著者も自ら告白せられて居る所である。にも拘らず著者は多年の研究を傾注して本書內において幾多の語原の新解釋を試みられた。國語を以て試みられた解釋中には、從來の學說にとらはれざる著者獨特の創見も少からず存して居るやうであるが、近來その方面の研究に遠ざかつて居る自分は、敢てそれ等に對する批評がま

しい事を述べる事を遠慮する。唯自分は朝鮮在住のゆえをもつて朝鮮語關係の部を通覽する義務を有するものゝ如く感ぜられた。よつて一わたりその部をひろひ讀みしたが著者はその方面においても幾多の新開拓を試みられて居ることを發見した。ここにその若干の例を擧げるならば『あぎ』(小兒)『あに』(豈)『あや』(漢)『ありなれ河』『いを』(魚)『かさ』(笠)『から』(韓唐)『き』(寸)『こほり』(郡)『そしもり』(曾尸茂理)『たひ』(鯛)『てら』(寺)『ぬま』(沼)『はた』『はたけ』(瘢)『むれ』(山)『むろ』(窖室)『わた』(海)等の語を朝鮮語と關係させて說くことは、從來もしば〳〵學者によつて唱へられた所であつて(著者とすべてが意見を同じうする譯ではないやうだが)敢て珍しいとも思はれぬが『あみ』(女性の尊稱)はㅇㅣ(母)と『おみ』(使主)『は』ㅂㅣ(敬稱)と『おりかも』(羅甃)はㅇㅑㄱㅂ(布の材料たる毛)と、『かち』(步)はㄱㅏㄷㅏ(行く)と、『かむなび』(神名備)は神の뫼(山)又は神のㄴㅐㅁㅜㄹ(木)と、『くだら』(百濟)は『樂浪』の韓音と、『さ』(間)はㅅㅐ、ㅅㅏㅣ(間)と。『し』(食)はㅅ(飼の音)と、『ひ』(水、氷)はㅂㅣ(雨水)と、『ひたひ』(額)はㅂㅅ(櫛)と、藤浪の『なみ』(浪)はㄴㅐㅁㅜ(木)と、『みさを』(風聲)はㅁㅣㅇ(微聲)と、『もだ』(默)は吳(打消の語分子)と、『もとな』(本名)は吳ㄴㅐ(愚)と、『よぼろ』(丁)はㅇㅕㅂ(呼びかけの語)と、『をさ』(譯語)はㅇㅓㅅㅏ(語師)と關係ありとせるなど、中には贊同しかねるものもあるけれども、未だ先人の說きおよばなかつた所に斧鉞を加へられたものもある。又本書に載せられて居る語の中『うし』(牛)、『かぶと』(冑)『かもめ』(鷗)、『くも』(雲)、『しま』(島)、『たく』(拷)、『なべ』(堝鳥)の如き語は從來可なり一般的に朝鮮語と關係あるものと考へられてゐるが、著者がその旨を何等註記せられなかつたのはその說をとらぬといふことを漏らされて居るものと見てよからうか。

余は目下のところ日鮮兩語の比較といふことを研究の直接對象とはしてをらぬ。しかしながらその研究の道程において兩語の間にいちじるしき類似の存することを發見することが、しばしばある。著者が本書に採錄し、國語を以て語原を說けるものの中にも朝鮮語と共通ではあるまいかと思はれるものが時々發見される。たとへば『あふひ』(葵)は朝鮮語아욱又はㅇㅏ吳(方言)と、『なつな』(薺)はㄴㅐㅇ、ㄴㅐㅅ等と關係が存しないか又『おそひ』(衣)なる語はㅇㅣ、ㅇㅢ(何れも『衣』の義、後者は主として北鮮地方に行はる)と關係あり、更に滿洲語etuku, adu にも餘脈をひいてゐるやうであり又『みづち』(虬、蛟)なる語の『みづ』は朝鮮語미리、미르(龍、辰)に當たり更に滿洲語の mu dui (穆都哩、龍、辰)にも血緣をひいてゐるやうにも考へられる。又著者は『さちや』『さつや』(獵矢)『さつを』(獵男)における『さち』の原義をㅅㅏ(刺)チ(靈)とし『そや』(征箭)の原義を直箭とせられてゐるが、これ等の語にある『さち』『さつ』『そ』等は朝鮮語살(矢)に當たるものと解せられまいか。『さつや』『そや』の『や』は、本來『矢』を意味する『さつ』『そ』更に國語の『や』(矢)が添加せられたものではなからうか。こんな種類の語原の詮索を夏の日長にやつてをつたら、何時埒が明きさうにも見えない。

こゝについでながら述べさせて貰ひたいことは、言語の比較研究は言語の歷史を稽へ、その時代を考慮の中に置かねばならぬことである。從來の日鮮語比較研究論の多くは、かゝる方面の用意が足らず、やゝもすれば思ひつき主義、御都合主義に傾いた弊がある。今後研究法としては是非ともグリムその他が印歐語乃至ゲルマン語において試みた如き音韻變化の法則の如きものが確立せられねばならぬと信ずる。朝鮮字音の頭にあるハ行音は國語字音ではカ行音になるとか朝鮮字音の末尾にあるグ音は國字音ではウ音で現れるなどいふのは一つの音韻法則に相違はないがかゝる種類の規則が隱れたるものとしてなほ存在しないからこれ等を十分究めねばなるまい。今その假說の一例を擧げるならば朝鮮字音の頭にあるチャ行音はいふまでもなく日本字音では大體に於てサ行音であらはれる卽(ち)『作』(작)は『サク』、『子』(자)は『シ』、『全』(전)は『ゼン』、『眞』(진)は(シン)となるが如きこれである。この音現象は字音についてのみならず、一般の語の現象にもそのまゝ適用せられないだらうか。日本語『さし』(城)『さる』(猿)なる語の語原に關しては兎角の論があらうが、余はチャ行の頭音を有する朝鮮語잣(城)、잣(猿)と源を同じうするものと考へる。『さし』は『草羅城』『己叱己利城』『避城』など三韓の地名においてのみ用ひられるのを見ても、著者の意見の如く朝鮮語となすを至當とするが、猿の語原を『サアリ』(然有り)の約とせられたるは如何にも苦しい說明法と評せねばならぬ。余は잣と猿との間に直接の語原的關係が存することを認めんとする者である。たゞこの際朝鮮語잣の語尾にあるSの音が、日本語にて『サル』の如くラ行音であらはれるのを疑ふ人があるかも知れぬが、これまた兩語の上に存する末音の規則とでも稱すべきものにより十

分說明せられるやうに思ふ。

要するに本書のもたらす使命は我國語の語原學の方面のみならず廣く文獻上國語教育上にもおよんで居て、その範圍頗る廣汎である從つて以上余の試みた紹介妄評は未だ以て價値ある本書の全局を察するに足るものではない事はいふまでもない。しかも余が敢てこゝに禿筆を執つて一部の妄評を試みた所以は著者の勇邁なる學究的態度に深甚なる敬意を表するが爲である。今後の國語學界はますます多事である余は本書が斯界に貢獻する所頗る多かるべきを信ずると共に、著者がます〳〵自重自愛この方面の開拓に精進せられんことを希望するものである。

藤田元春

我國の古代、漢字渡來以前、既に言靈の幸はふ國と我等の祖先が自讃したゞけあつて、豐富にして婉曲典雅な大和言葉なるものが大成されてゐた。しかしさうした古語は永い間言ひつぎ語り傳へられたのであつたから、口から耳へ移つてゆく間にいろ〳〵變化もすれば、或は全く忘れられたのも出來たけれどもその轉訛變遷の間には、自から音韻學上の約束もしくは語法上の習慣が出來て、今日にして猶過去の言葉を用ひる場合が多い。就中地名として或土地に一つの名が與へられるといふ場合には、その定着性は著しいものであつて容易に遷らないものである。面白いことには多くのさうした地名には、その名のついた原因を語るものである。

例令ば上古の御名代、王朝の鄕、里、中世の莊、保、名等をはじめ國府、別府、新田、何條、何里、一の宮、西の宮、二日町、四日市、さては天下茶屋、三軒屋、八軒屋などいふ地名が永存し、それが直ちに過去に存在した聚落の構成要素乃至はその部落の職分迄をも告ぐるもあれば、安曇、海部、犬山、鳥飼などの如く、古代の一民族の分布もしくは職業の差異などを現はすものもあり、同地名の分布によつて民族移動の跡を證すること洛北の出雲路、播磨のシラクニ、大阪の百濟の如きものがある。これ又數へ來れば限りがないと思はれる。

玆に於てか人文地理學に於ては地名の研究は重要な一部門を形成する。しかし不幸にして今日迄にさうした方面の研究に手をつけるものが少いのは、實は材料の蒐集が容易でなかつたためでもあるが同時に我國の古語が十分に闡明されてゐなかつた結果でもある。近頃になつて栗里先生の鄕名同唱考や、柳田國男氏の地名の研究(地學雜誌)の如きものが出てゐるけれども、何れも不十分であることを免かれない。これは單に內地語のみでなく、三韓の古語やアイヌ語などの關係もあるので、愈問題が困難になるからであつた。しかしこれら類似の古語を隣の接觸民族に求めるよりもさきに、我等は我國の古語を知り、それによつて我國の地名を解釋し得る丈けの極めて當然なファーストステップを踏まねばならぬ。さうした意味に於て本書は實に古事記傳以後の試みであるといつても或は過言でない。

栗田先生の鄕名同唱考の安藝といふ地名には、その證を得ずとあるが、本書を見るとアキは秋又は阿藝とは全然別の語であつて、安藝、土佐、筑前、近江、美濃さては大和の秋津等アキの地名は多いのみでなく同音異字のアキの分布が廣いと同時に、シキ、カツラギ、オタキ、サヌキ、ハヽキ、オキ、イキ等の類似語も多い蓋し上代キ族の占據地であつたことを表示するといふ新解釋を出してゐる。又足柄を解說して、足利、足鏡別との類似をのべ、飛鳥を解して、ア(接頭語)スカ(住所)卽人住む所で、春日はカ(神)スカ(住所)神の住所、だと斷定するの類の如き蓋し著者獨特の創意斷解である。恐らく在來の地名研究者に取りては由々しき挑戰ではなからうか。予はかうした本當の創見を、すべて妥當なりとは考へないけれども、アキのキ、紀伊のキがアイヌ語の葦といふ語で解釋されるといふ說などを棄てゝ、今こゝに全く一家の見識を立てた著者の勞苦を尊敬せずには居れない。

予は本書によつて古語の機構が明に知られると同時に、古い地名が正當に解釋さるゝ栞となるべきを期待して、江湖に本書を推奬する一人である。

勿論本書は古語を明にするための辭書であるから直接國語學者、史學者などの必讀の書であるけれども、予は予の專門的見地から、單に本書に收蒐された地名とその地名研究の方法とに深い興味をもち、本書の世に出たことを慶賀すると同時に、本書を出版した刀江書院に對して贊辭を呈することを當然だと考へる。

次田潤

松岡靜雄氏は現代の我が古典研究家の中で、最も特色のある學者の一人である。私は、同氏が近年矢繼早に發表せられた、日本古俗誌・日本言語學・常陸風土記物語・播磨風土記物語・東歌

と防人歌などを讀んで、其の研究の態度や方法に敬服すると共に、先人未發の新說に驚き、且それによつて蒙を啓いたことが尠くない。此の度また多年の研究の結果を傾けて「日本古語大辭典」の如き大著を公にせられたのは、更に我が學界に大貢獻をせられたものであつて、古典の研究にたづさはる吾々にとつては、直接に多大の便益を與へられたことを感謝しなければならぬ。

日本の古典、殊に記紀萬葉等に關する文學としての研究や、文化史的若くは思想史的な研究は、近年著しく進歩して來たのであるが、其基礎的研究ともいふべき訓詁註釋の研究は、未だ江戸時代の研究の範圍を出るものが尠く、語源的解釋や語法上の說明を始めとして、なほ開拓しなければならぬ餘地の多くが殘されて居るのである。私は現代の古典研究に從事する人々の便宜をはかる爲に、さしあたり、記紀萬葉風土記祝詞宣命等の古典の訓義に關する先人の研究の結果を、各語彙によつて自由に檢索する事が出來るやうな辭書を編纂する事が、目下の急務であると考へてゐた。而して其の辭典には、出典を原形のままに示し、其の言語の訓義に關する學者の諸說は、これを古今に亙つて、年代順に原文のまま揭載し、なほ採錄すべき語彙は、神名人名地名物名の如きものにまで及ぶことが肝要であると思つてゐた。然るにこの度松岡氏が公にせられた「日本古語大辭典」は、右の如き希望條件を滿足させた上に、更に一歩を進めて、現代の諸科學を參考し、而も科學的研究法に基づいた著者獨創の意見を詳密に揭げられたのである。

即ち此の辭典に收錄せられた語彙は、記紀萬葉風土記舊事記續紀祝詞宣命古語拾遺日本靈異記神樂催馬樂等に現はれた言語を網羅し、其の語彙の種類は、一般の國語辭典や歷史地理人名等の辭書によつて、檢索することの出來ない神名人名地名動植物名から、語法上の形式語にまで及んで居る。而して其の解釋は、著者の深切にして用意周到な考から立案せられた、獨特の方法と形式によつたものであつて、各語彙に就いて訓・語源・意義・出典・攷證等の各項に亙つて之を解說し、其の解釋には先づ古人の研究の概要を記した後に、先人の諸說に全然捉はれない所の、自由にして科學的の新說を詳細に述べられて居る。其の新研究は、氏が是までに發表せられた諸研究によつても窺はれるやうに、時には學者の異議を挾む餘地が無いでもないが、併し長く因襲的に尊信せられてゐた從來の諸說に對して其の欠陷を指摘し、又現代の科學的知識に立脚した新研究には確かに學

ぶべき所があり、學徒に對しては、少からず刺戟を與へられるものであると信ずる。

要するに此の辭典は、從來の辭典の缺陷を十分に補ふものであるばかりでなく總ての古典に現れたあらゆる種類の言語に、精細且獨創的な新解釋を下したものであつて、近時の學界に稀に見る大事業である。此の辭典によつて、今後學徒が、得る便益は莫大であり、又我が古典研究は、この書の出現によつて、多大の刺戟を受けるであらうと思ふ、私は著者とは一面識のない者であるが、此の好著の出版を學界の慶事として喜ぶと共に、之を廣く紹介したいと思つてこの一文を草した次第である。

久松潛一

辭書の發達の上で、一般的な國語辭書の必要なる事は言ふまでもないが、國語の如き時代によりまたは作家により特殊の形態と意義とを有するものに於ては、一般的な國語辭書ですべてを網羅することは困難であるために、種々の特殊の辭書を要するのである。かくて主なる古典や作家の作品によつた萬葉辭典、源氏物語辭典、近松辭典、西鶴辭典が編まれるべきであり、同時に時代を中心とした平安文學辭典、元祿文學辭典等も現れるべきである。かういふ特殊辭書は近時漸く着手され刊行されるに至つて居るのはまことに喜ぶべきことゝ思ふ。今それらの一として當然出づべきであつた奈良朝以前の古典語の辭典が松岡靜雄氏によつて完成されたことは何たる喜びであらう。松岡氏は既に日本言語學その他の著書によつて言語學や民俗學の豐富な知識と創見の多い學說とを提唱されたのであるがかくの如き氏によつて記・紀・萬葉・風土記を始め十數種の古典の中から一萬二百餘語の語彙を集めてこれに精細な解義を施された本書が編まれたことはまことにその人を得た感がある。

本書の組織を見ると、語誌篇と訓詁篇とに分ち、訓詁篇には古事記、日本記、萬葉集の訓を擧げ、語法要錄を附してあるが、これは記、紀、萬葉の重要なるテキストとなるであらう。語誌篇は、語彙の解釋であるが、普通名詞のみならず人名をも擧げてあるのは特殊辭書として至當なる用意である。殊に各語に就いて訓・原語・語義・出典や攷證等に分けて精細に解說してあり、その間に從來の諸說をも檢討し、著者の創見が隨所に見られるのは本書を學問的に重からしむるものである。もとより是等の古典に現れる語彙の意義を歸納的に決定するには必ずしも多く

の資料があるのではないから、自然その解釋に主觀的批判を要する點が多く、そのために未だ定說とすべきに至らないものもあらうが、なほ氏の創見が、一說として重要なる意義と價値とを有することは疑はれない。

さうしてこの種の難解な語彙を一々丹念に解釋された氏の精根と博き學識とはまことに驚嘆すべきものがある。末輩私の如きはたゞ〳〵氏の業績に對して滿腔の敬意を表するのみである。

折口信夫

日本の古代研究に從事してゐる學者の中、本書の著者松岡氏ほど、其の方面の廣く、沒頭する事の深い人は、今の處他にない。此まで出た數種の著述は、そのあらゆる方面から、最も古い日本の俤を再起する事に努められた業績である。其等の書物には、松岡氏の個性が顯れ過ぎるほど著しい獨自のものがあつた。此が松岡氏の學說の强みでもなり、稍缺陷を作つてゐる傾きもあつた。ところが今度の古語大辭典には、頗る客觀的態度が加へられて來てゐる。

在來の學說に考へ直さねばならぬ餘地の存する事を示すと言つた暗示が、豐富になつてゐる。此書物を利用する人々の得る利益の第一は、かう言ふ處にある。傳襲的の學說が新しい學說の前には如何に批判せらるべきものかと言ふ自覺を抱かせられ、眞の意味の個性に限らず學問に進み入る昂奮を感じさせられるであらう。

松岡氏の家系には、かうした學問に對する情熱が傳つてゐる樣である。現に其の父君より始めて、一族の間に五六人の古代を對象とする學者や藝術家が揃うてゐる。此は、其血がさうさせるのである。さうして我々は、其點に最も此の著者の信賴すべき素質を見てゐるのである。その上、松岡氏の最もよい態度は、「古代研究」を構成するにまづ地ならし作業として、言語研究文獻研究からはじめられた事である。さうして其結晶として現れたのが語誌篇、訓詁篇の二部から成り立つ此古語大辭典である。

中村孝也

松岡靜雄先生の大著「日本古語大辭典」を卓上に置いて、私は異常な感動の大浪に漂はされるのを覺える。鵠沼の病床に端座して、一ぱいに積上げた圖書を抽取りながら、學んで倦まず、敎へて已まざる先生の姿は、昔の先哲の再現としか思はれない。而して、多くの論策を公けにされて、國語と古典との闇黑を照映せられ、終に此大著を成された。正續二卷二千數百頁の大冊は、卓上に在つて、「御前は何をしてゐるのか」と警告を發してゐる。我輩健全にして、徒らに每日のビジネスに精力を費し、而して會心の業績を出だすことの少きもの、顧みて赧然たらざることを得ない。

日本古語大辭典は、正編語誌篇と續編訓詁篇とより成り別に語法要錄一篇を附載し、卷頭十四頁の序說において、本書著述の趣旨を詳說してある。この序說を熟讀すれば成程と首肯することではあるが、本書は所謂辭典の常型に當嵌まらぬ程に淸新の氣に滿ち、啻に單語の解釋、出典の例示にとゞまらず、その解說を誘導せる根據及び推論の過程を明示し、語の構成を分析して之を還元し、その原義に徹到することを努めてゐる。そして固有名詞も、普通名詞から出て居るといふ見解によつて、神名・人名・地名の語釋をなし、枕詞・歌詞の一句・その他の成句にも說明を加へ、本書をして普通の辭典と異る「語誌」たらしめるに至つた。卽ち一見すれば、國語辭典と、神名辭典と、人名辭典と、地名辭典と、成句辭典とを合成せるやうに思はれるけれど、その語の構成を解析して原義を尋究することにおいて、言語學者としての著者の面目が、躍如として全卷に生動するを覺える。

私は古典文學と古代史とに對して已みがたきあこがれの情を有し、これを通じて知り得る古代民族の素朴なる生活と、純眞なる氣分との裡に、自分自身を見出すことを樂しむものである。今やこの大著の案內に隨ひながら輕快にして幽玄なる世界に逍遙することが出來ると思へば、心は悅びに滿たされる。併しながら「著者は餘命のあらん限り研究を續けて行くつもりである」といふ句を讀んでは、深く自ら慙づると共に、先生の健康を思はざるを得ない。冀くは斯道の爲に自重自愛せられんことを。

深甚なる感激を以て、本書を世間に紹介するに當り、特に、上天の庇護の先生の上に豐かならんことを祈る次第である。

跋

前篇語誌を起草し始めてから此篇の筆を擱くまでに正に二ヶ年を要した。二十四ヶ月七百三十日の月日は短いとはいへぬが、原稿の嵩は身長の二倍に達し、紙數一萬八千枚を算するから、一日の平均功程二十五枚になる勘定で、「遠くも來にけるかな」の感がある。此のやうに功を急ぐ必要はないのであるが、宿痾になやむ身であるから、何時執筆不能に陷るかも知れず、其が爲に刊行書肆に迷惑を及ぼすことがあつてはならぬといふ懸念から、一氣呵成に書き終へたのであつた。幸に健康上大なる障害もなく、不備を免かれぬことは勿論であるが、とにもかくにも完結を見たことは著者の欣幸とする所である。

語誌篇は文案の記憶が散逸せぬ以前に書き上げたが故に此種の著作に免かれ難い重複矛盾を最少限度に止めることが出來たが、一萬二百有餘の語(句)を收錄したに拘はらず、尙之を漏したものも少くはない。例へばサヘキ(佐伯)の直アガノコ(阿俄能胡)の如きは草案には認めて置いたのであるが、つひに書き落とした。此等の誤脫は他日平安朝以降の語誌を續篇として公にする機會があつたら追補す

るつもりである。

又語誌篇中排列の順序を誤まつた箇所が少くはない。ことに三二四頁オノゴロ島から次頁のオフシアマまでは三二八頁のオノガヲヲの次に入るべきもので、發行前に氣づいたけれども、既に訂正の機を逸し如何ともすることが出來なかつた。本書の如く植字に大なる技巧を要するものに在つては一部の改版は至難であるから、粗漏の罪を謝して宥免を請ふの外はないのである。

當初の計畫は語誌篇のみであつたが、前篇の序文に述べたやうに、訓讀が正しくなければ語釋は無意義になり、語法を明にせねば訓讀を誤る虞が多いので、此二者を合はせて續篇として發表することにしたのである。古訓乃至先學の訓は尊重すべきこと勿論であるが、寸毫も誤なきものとする事は出來ぬ。否、萬葉集の如きは今日まで尙訓讀不能とせられて居る歌さへあるのであるから、之が改訂、補正を試みるのは決して冒瀆ではなく、契沖、眞淵、宣長等の學匠も敢てしたやうに、寧ろ後學の義務である。さりながら之を決行するには單に可否の論ばかりではなく、確乎たる學術的根據を有せねばならぬ。上代の言語思想が後代人に不可解なのは當然であるとして放置する事は決して學術に忠なる所以でないが、近代的思想と後世の言語とを以て古書を說かうとするのは更に甚しい妄擧である。或は個人哲學的空理論から出發し、或は自己の感觸にのみ訴へて理由なき改訓を試みるが如きは極めて危

險なる獨斷といはねばならぬ。獨斷又は憶斷といふ語は往々他人の說を中傷するに惡用せられることがあるが、相當の論據があるものであれば、假令世の通說に反するものであつても、或は自己の所信と相違しても猥に獨斷呼ばりをすることは許されぬ。其論據を不當なりとするならば正々堂々と之を論破すべきで、口不レ能レ言然期々知二其不可一といふが如き論理は周昌のやうな不具者に限つて容認せられることである。

著者が訓詁篇を執筆するに當り苦心したのも此點であつた。舊訓又は先學の訓は非理の極めて顯著なる場合の外、決して「不可」といふ一言を以て葬り去るべきものではなく、同意し得ざる場合には必ず其理由を擧示するを要し、著者の創見も亦其論據を盡さねばならぬのであるが、冗漫に流れず、議論に走らぬやうに簡明に記述するは至難の業であるから、技工的には語誌篇よりも遙に多くの勞を費した。平素尊敬私淑する先學の名を擧げ、若くは著書を揭げて其誤謬を指摘するのは私情に於ては忍びぬことであるが、簡約を期する爲にも、讀者の嚴正なる批判を仰ぐについても止むを得ぬことであつた。

自說の論據も亦能ふ限り簡單に記述したが、語法論に亘るものは一々之を擧げることの煩を避け、卷末の語法要錄中に一括して論ずることにした。此一篇は兩三年前世に公にした拙著「日本言語學」の

要點を叙述の順序を變へ、若干の改修を施して讀み易いやうにしたもので、現行の文法書とは頗る說を異にする點もあるが、既に世の批判を問うて後、年を經たものであるから、少くとも一說として認められたものと信じ、詳論は省略した。著書が江湖に對つて特に留意を要望するのは動詞の諸形、就中時格活用と助語の用法とは古今頗る趣を異にするといふことで、之を無視して古典を讀むことは殆ど不可能というてもよいのである。

歌詠に在つては語釋語法の外に風格情趣を考慮に入れて解讀せねばならぬ。從來之に關する準繩が示されなかつたので、往々句法、韻律、囃詞、枕詞の味等には無頓着に讀み下された嫌があるが、作者の本意に背くことはいふまでもない。例へば佐保河爾小驟千鳥夜三更而〔一一二四〕を「さほ川にさわめく千鳥さ夜ふけて」と訓めば律調にも叶ひ、且頭韻の美をも發揮するのであるが、第三句をヨクダチテと訓しては意は通ずるけれども風格を損し、吟誦にも快くはない。又五七音の代りに四六調が用ひられたことは掩ふべからざる事實であるが、之に留意したものは少い。人麻呂の名歌「石見の海」〔一三一〕中に見える「渡津の荒磯の上に」といふ句の如きすらワタツノ・アリソノウヘニと態々ウ音を加へ、四七音に訓して怪しとしなかつたのである。此ことについては別に一文を草して一括して論ずる必要があり、著者にも聊か準備はあるのであるが、今回の出版の間に合はなかつたから、心づいた限りよみ改めて簡單に其理由を註記した。詳しい議論は遠からず發表する拙著「歌學」中に述べる。

私は舊訓乃至諸家の訓に少からぬ改訂を加へたけれども、決して三大古典を完全に讀破し得たりとするものではなく、且自說に誤なしと主張するものでもない。管見の及ばざる所のあることは勿論、世を欺く氣は少しもないが、若干の誤信は免かれぬ所であるから、世の識者、後の學者の指摘、訂正を切望する。此くして一歩一歩眞實に近いて行くことは斯界の爲に最も慶賀すべきで、本著の目的もここにあるのである。

異說が紛出して古典の訓が定まらぬのは實に歎はしいことではあるが、之が統一は學問の發達に待つの外はない。世には或る妥協的な一定訓を設け、國民をして無批判に之に據らしめようと努力して居る人もあるやうであるが、明治初年以來の問題たる字音假字遣の統一すらも尙實現せぬのは學術的論究を忽にして俗論によつて決を執らうとしたからで、權威あるべき國語調査會の決定が一朝にして覆るといふやうな醜態をすら演じたのである。定訓設定を主張する人の眼から見たら、著者のやうに新に異說を提出するものゝあるのは迷惑な事でもあり、又苦々しくもあらうが、其人々がいふ定訓は決して價値のあるものではなく、非學術的統一は人心に加へる大なる壓制である。眞に正しい訓を得たいといふ意ならば少くとも萬葉集の歌を一つも殘らず讀み下し得るだけの研究を第一歩とする。

本篇には檢出に便にする爲に索引を添へたらよからうといふ意見もあつたが、訓によつて出典を求める爲には語誌篇が略〻其目的に適するから、更に之を添付することは屋上屋を架する嫌があり、字によつて訓又は出典を檢出する索引は必要ではあるが、漢字其ものゝ性質上、扁旁によるも劃數を以て引くにしても餘り便利なものではなく、文部省假字遣による字音索引は古典には不適當であり、舊假字遣は現代人には煩はしく、いづれにしても索引の目的には適はぬやうに思はれるので、他日の攷究に讓ることにした。ローマ字索引の如きは假字遣問題が解決した曉でなければ到底望まれぬことである。

上述一萬八千枚の原稿は私に取つては思ひ出の多い大切なものであるから、適當な保存法を講じたいと考へて居た所、知己京都御影堂住職木本學樹師の斡旋により、木本學禪老師の快諾を得て、近江國伊香郡の名刹長祈山淨信寺(木本寺)の書庫に收藏せられたることになつたのは私としては本懷此上もないことである。

終に臨みて本書について推薦、紹介又は批評の勞を執られた先輩同學諸氏の好意に對し篤く感謝の意を表する。いづれの學統にも屬せぬ私は獨自の立場から忌憚なく所信を披瀝したので、或は忌諱に觸れはせぬかとの懸念をも有して居たのであるが、諸大家が斯學の發達の爲に寛容の襟度を示されたことは私の深く感銘する所である。

昭和四年九月

於鵠沼　松岡靜雄

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月十八日發行

定價金八圓

日本古語大辭典

訓詁篇

版權所有

著者　松岡靜雄
東京市神田區駿河臺北甲賀町二十三番地

發行者　尾高豐作
東京市神田區表猿樂町二番地

印刷者　中村修二

印刷所　開明堂
片山製本所

發行所　刀江書院
東京市神田區駿河臺北甲賀町二十三番地
電話神田（三二一八）（三二一九）
振替東京七三二一八

585
63